

# *ES/1 NEO*

**CSシリーズ**

CS-ADVISOR

使用者の手引き



株式会社 アイ・アイ・エム

**© COPYRIGHT IIM CORPORATION, 2022**

**ALL RIGHT RESERVED. NO PART OF THIS PUBLICATION MAY  
REPRODUCED OR TRANSMITTED IN ANY FORM BY ANY MEANS,  
ELECTRONIC OR MECHANICAL, INCLUDING PHOTOCOPY RECORDING,  
OR ANY INFORMATION STORAGE AND RETRIEVAL SYSTEM WITHOUT  
PERMISSION IN WRITING FROM THE PUBLISHER.**

**“RESTRICTED MATERIAL OF IIM “LICENSED MATERIALS – PROPERTY OF IIM**

# 目次

第 1 章 CS-ADVISOR .....	1
1.1. 機能概要 .....	1
1.1.1. システム評価機能 .....	1
1.1.2. 統計技法例 .....	1
1.2. 起動方法 .....	3
1.3. 初期設定 .....	4
1.3.1. ライセンス設定 .....	4
1.3.2. 動作環境設定（共通） .....	4
1.3.3. ES/1 NEO Performance Web Service 連携 .....	5
1.3.4. インポートフォルダ設定 .....	7
1.3.5. 動作環境設定（CS-ADVISOR／CS-Network ADVISOR） .....	8
1.3.6. 出力ファイル群の管理 .....	19
1.4. 評価条件ファイル .....	20
1.4.1. 評価条件ファイル作成 .....	20
1.4.2. 評価条件ファイル編集 .....	40
1.4.3. 評価条件ファイルコピー .....	41
1.4.4. 評価条件ファイル削除 .....	41
1.5. 評価実行 .....	42
1.5.1. 評価実行手順 .....	42
1.6. 評価結果閲覧 .....	52
1.6.1. 評価結果ファイル閲覧手順 .....	52
1.7. 相関判定 .....	58
1.7.1. 相関判定方法 .....	58
1.8. バッチ実行 .....	61
1.8.1. 実行手順 .....	61
1.8.2. 実行確認 .....	65
1.8.3. 実行中断 .....	65
1.8.4. スケジューリング .....	65
第 2 章 添付資料 A. SAP ERP 統計データを評価する際の注意事項 .....	66

# 第1章 CS-ADVISOR

## 1.1. 機能概要

CS-ADVISOR は、システム性能診断を行い、5 段階のチューニングヒントを出力します。これらの情報は、パフォーマンス低下が発生した際の原因究明に役立てることができます。チューニングヒントには重要度番号が割り振られます。重要度 1 は最も緊急度の高いものであり、重要度 5 は参考情報です。そのレベルに応じた対応を検討してください。

また、CS-ADVISOR では、システムの特性を容易に把握できるように、各種の指標の相関判定を行っています。例えば、システム全体のプロセッサ使用率とユーザやコマンド毎のプロセッサ使用時間の関係を調査し、相関が高いユーザやコマンドを表示します。この際にも、その相関の度合いに応じ相関度が割り振られます。相関度 1 は非常に相関が高いことを示し、相関度 5 は相関が低い状態を示しています。

CS-ADVISOR は、各種統計技法を駆使し、上級 SE が 2～3 週間かかる解析作業を数分間で行います。

### 1.1.1. システム評価機能

#### (1)問題点の把握

チューニングヒントからシステムに顕在または潜在している問題点を見つけ出し、相関情報より問題の原因を特定します。さらに、数値データを確認してシステムの特性を把握します。

#### (2)相関判定ナビゲーション

システム評価により指摘された問題点に対する原因の絞り込みや、システム特性の把握を容易にする機能を備えています。プロセッサ、メモリー、I/O、DB(Oracle、Symfoware、SQL Server、DB2)といった任意の指標値同士の相関を判定し、相関が認められる項目を出力します。

#### (3)データ抽出機能

各種パフォーマンスデータを統計情報として CSV 形式ファイルに出力します。グラフの作成も可能です。

### 1.1.2. 統計技法例

#### (1)パーセンタイル

通常、数多くの数値を取り扱う際、それらの数値の性格を表すために、平均、最小値、最大値、標準偏差などの値が利用されます。これらの値を利用すると、数多くの数値の特性を 1 つの数値で表現することができ、非常に便利です。しかし、時には問題が発生することがあります。例えば、'1'の値が 99 個あり、'1000'の値が 1 個あったとしましょう。この数値群の最小値は 1、最大値は 1000、平均は 10.99 となります。数学的には正しい数値ですが、いずれの値もこれらの数値群の特性を的確に表しているとは言えません。そこで、CS-ADVISOR/CS-Network ADVISOR はパーセンタイルと呼ばれる統計数値も活用しています。

パーセンタイルとは、対象とする数値群を小さい順にソートし、指定された個数番目にある値を代表値とするものです。例えば、100 個の値があったとすると、50 パーセンタイルは、小さい順に数えて 50 番目の値ということです。80 パーセンタイルは 80 番目の値、90 パーセンタイルは 90 番目の値ということになります。

50 パーセンタイルは、別名、中央値とも呼ばれています。平均値と 50 パーセンタイル値を比較して、もし平均値の方が低いようであれば、極端に小さな値があることが予想できます。また、最大値と 90 パーセンタイル値が同じであれば、数値群のうち、10 パーセントに相当する個数の値は、最大値に等しいことがわかります。

## (2)相関係数

数多くのパフォーマンス指標を用いてシステムの特性を判定する場合、それらの数値の変動要素から、関係があるか否かの判定を行うことが重要となります。

CS-ADVISOR／CS-Network ADVISOR では、各種の指標間での相関を判定するために、相関係数を求めています。

$$\text{相関係数 } r = \frac{\sum_{i=1}^n x_i y_i - n \bar{x} \bar{y}}{\sqrt{\sum_{i=1}^n x_i^2 - n \bar{x}^2} \sqrt{\sum_{i=1}^n y_i^2 - n \bar{y}^2}}$$

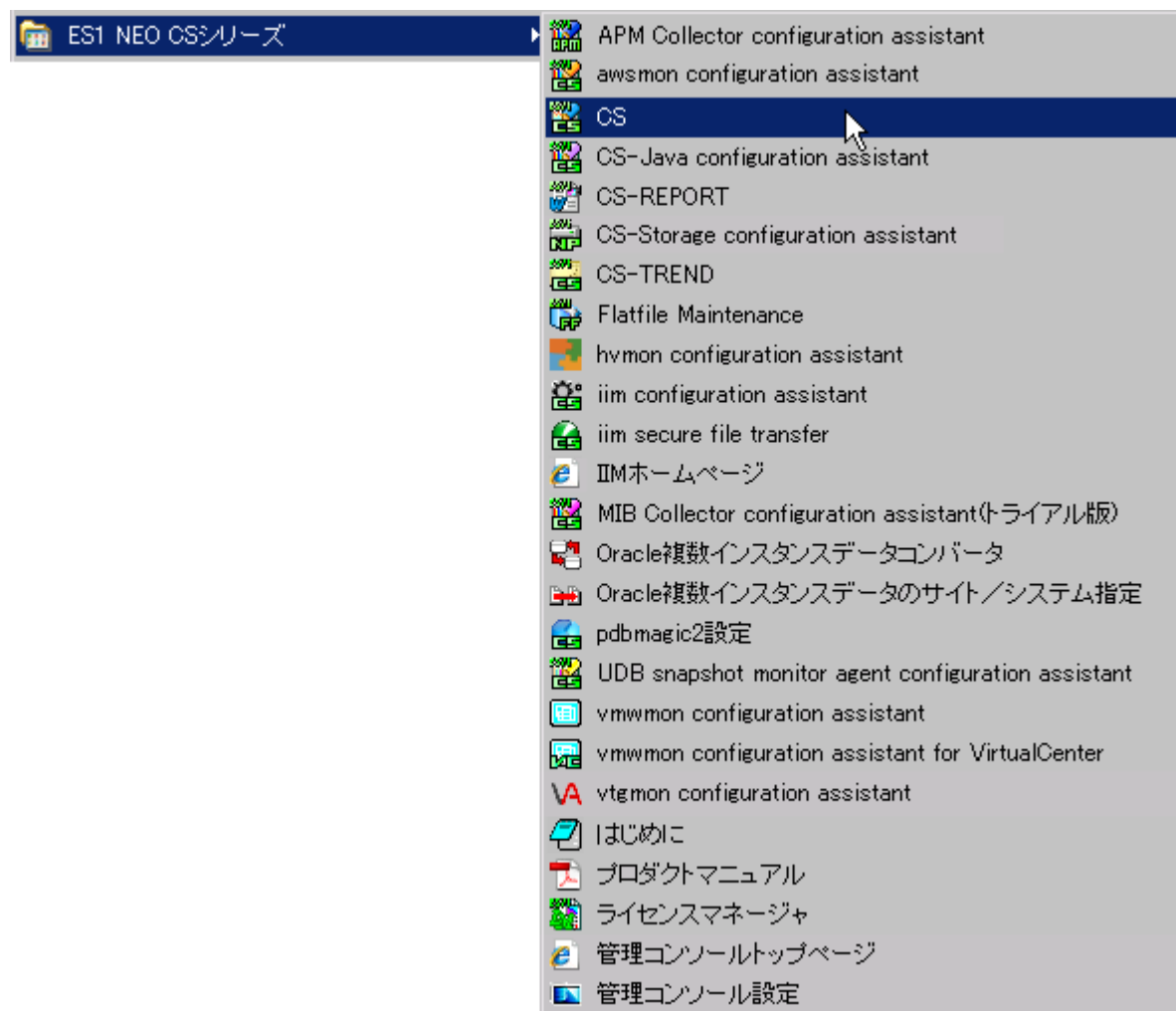
ここで求められる相関係数の値は、マイナス 1 からプラス 1 までの値を取ります。CS-ADVISOR／CS-Network ADVISOR では、この相関係数の絶対値を使用していますので、0 から 1 までの値となります。一般的に相関係数が 0.7 以上であれば、比較した 2 つの数値に相関があると言われています。また、相関係数が 0.3 以下であれば、それらの数値に相関はないと言われています。

ここで注意していただきたいのは、相関係数は決して値の大きさが近いと言っているのではなく、変動傾向が似ている度合いを示しているということです。従って、例えばシステム全体のプロセッサ使用率と特定コマンドのプロセッサ使用率の相関が高いと言っても、そのコマンドでプロセッサの大半を使用しているとは言えません。

逆に、数値の大小比較ではありませんので、全く意味の違った数値の相関をとることもできます。例えば、空きメモリー量とページング数の相関を取って、非常に高い相関係数が得られるならば、そのシステムでは空きメモリー量が少なくなるとページング数が増加すると言えます。

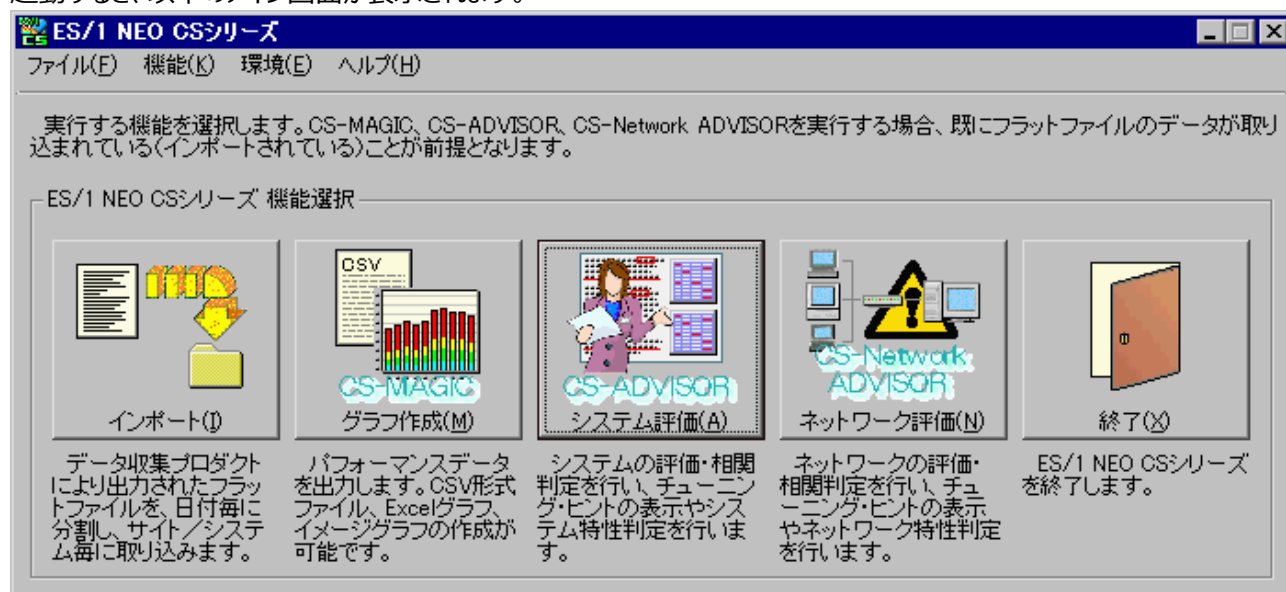
## 1.2. 起動方法

[スタート]メニュー → 「プログラム」 → 「ES1 NEO CS シリーズ」から「CS」を選択します。



または、ES/1 NEO CS シリーズのインストールフォルダ配下にある「Cs.exe」を起動します。

起動すると、以下のメイン画面が表示されます。



ここで[システム評価(A)]ボタンを押下、または「機能(K)」メニューの「システム分析/評価(CS-ADVISOR)(A)…」を選択することにより、CS-ADVISOR が起動します。

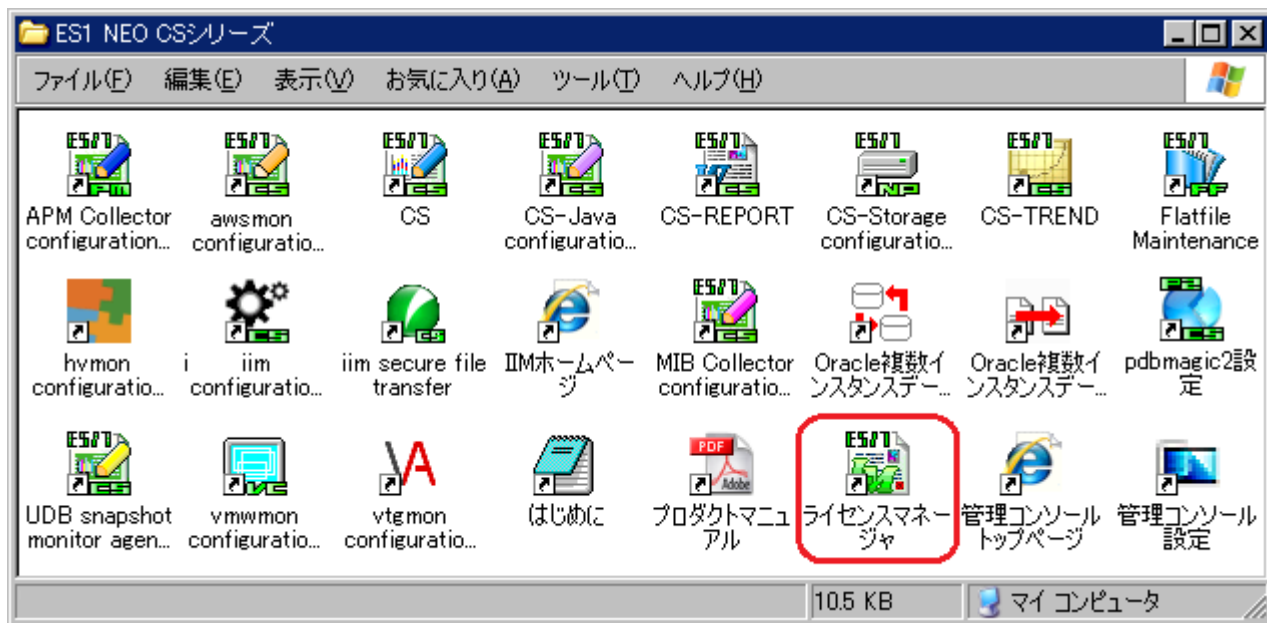
### 1.3. 初期設定

ここでは実際に CS-ADVISOR をご使用になる前に行う、初期設定について記述します。  
導入直後、各設定は初期設定値、またはインストール時に指定した設定となっています。

#### 1.3.1. ライセンス設定

ES/1 NEO CS シリーズのインストールが完了し、コンピュータを再起動した後、必ず最初にライセンスマネージャを起動してください。ライセンスマネージャは、プログラムグループの「ライセンスマネージャ」アイコンから起動する、または ES/1 NEO CS シリーズ インストールフォルダ配下の「iimlicm」フォルダにある「iimlicm.exe」を起動してください。ここでライセンスサーバ、またはクライアントの設定を行います。

CS-MAGIC 使用時に、すでに設定済の場合は、ライセンス設定の必要はありません。



ライセンスマネージャについては別紙マニュアル「CS-MAGIC 使用者の手引き 第 1 章 ライセンス」を参照してください。

#### 1.3.2. 動作環境設定（共通）

ES/1 NEO CS シリーズのメイン画面にある「環境(E)」メニューから「動作環境設定(共通)(E)...」を選択すると、「動作環境設定(共通)」画面が表示されます。

ここでの設定は、CS-MAGIC／CS-ADVISOR／CS-Network ADVISOR で共用します。

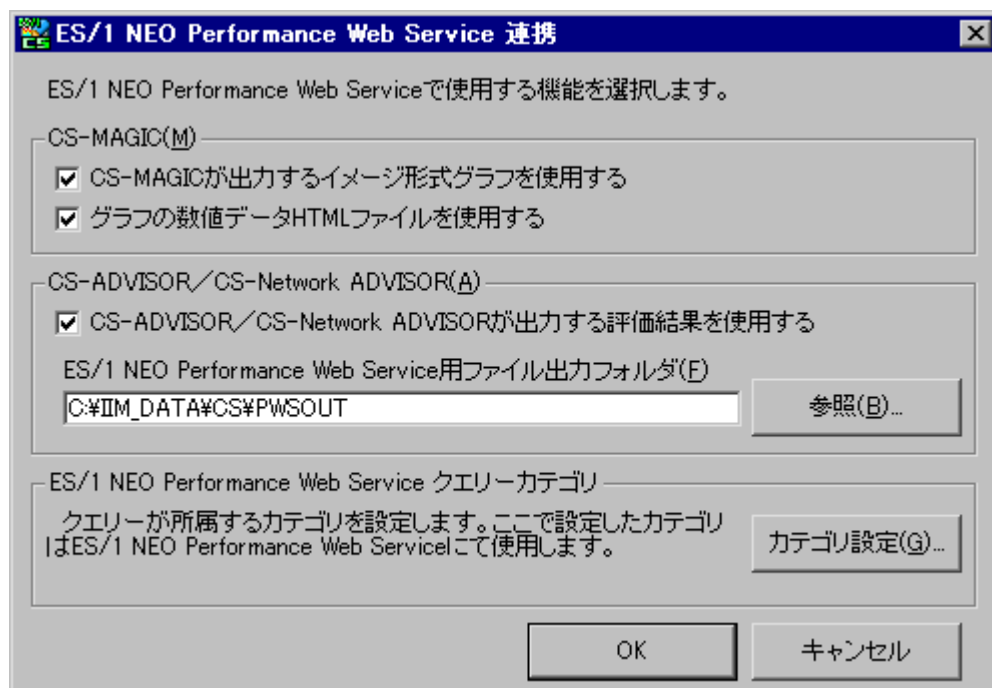
設定方法や設定内容の説明については、別紙マニュアル「CS-MAGIC 使用者の手引き 7.3.2. 動作環境設定(共通)」を参照してください。

### 1.3.3. ES/1 NEO Performance Web Service 連携

ES/1 NEO Performance Web Service は、CS-MAGIC で作成したイメージ形式グラフ、グラフの数値データ、ミニグラフ、及び CS-ADVISOR で作成した HTML 形式の評価結果ファイルをホームページ形式で統合し、Web 上にて閲覧するためのプロダクトです。

ここでは、ES/1 NEO Performance Web Service を使用する場合は設定を行います。

「ES/1 NEO CS シリーズ」メイン画面の「環境(E)」メニューにある「ES/1 NEO Performance Web Service 連携(W)...」から起動します。



#### (1)CS-MAGIC

##### ①CS-MAGIC が出力するイメージ形式グラフを使用する

CS-MAGIC を実行し、作成されたイメージ形式グラフ(GIF/PNG)を ES/1 NEO Performance Web Service に取り込みます。

ここをチェックすると、インタフェース用の情報ファイルが出力され、ES/1 NEO Performance Web Service はこれを参照し、グラフファイル等を取り込みます。

##### ②グラフの数値データ HTML ファイルを使用する

上記(1)-①がチェックされている場合に選択可能です。

作成したイメージ形式グラフの元となっている数値データを、HTML 形式にて ES/1 NEO Performance Web Service に取り込みます。

#### (2)CS-ADVISOR/CS-Network ADVISOR

##### ①CS-ADVISOR/CS-Network ADVISOR が出力する評価結果を使用する

CS-ADVISOR/CS-Network ADVISOR を実行し、出力された評価結果を、ES/1 NEO Performance Web Service に取り込みます。

ここをチェックすると、ES/1 NEO Performance Web Service 用評価結果ファイル群を出力します。



②ES/1 NEO Performance Web Service 用ファイル出力フォルダ

上記(2)-①がチェックされている場合に選択可能です。

ES/1 NEO Performance Web Service 用評価結果ファイル群を格納するフォルダを指定します。

(3)ES/1 NEO Performance Web Service クエリーカテゴリ

クエリーカテゴリは、初期状態で「プロセッサ」や「メモリー」、「I/O」等が用意されています。このカテゴリを任意に追加することができます。ここで指定したカテゴリは、クエリーグループを定義する際に選択する、クエリー一覧のリストに反映されます。

---

#### 1.3.4. インポートフォルダ設定

---

CS-ADVISOR は、ここで指定したフォルダに格納されているフラットファイルを読み込みます。

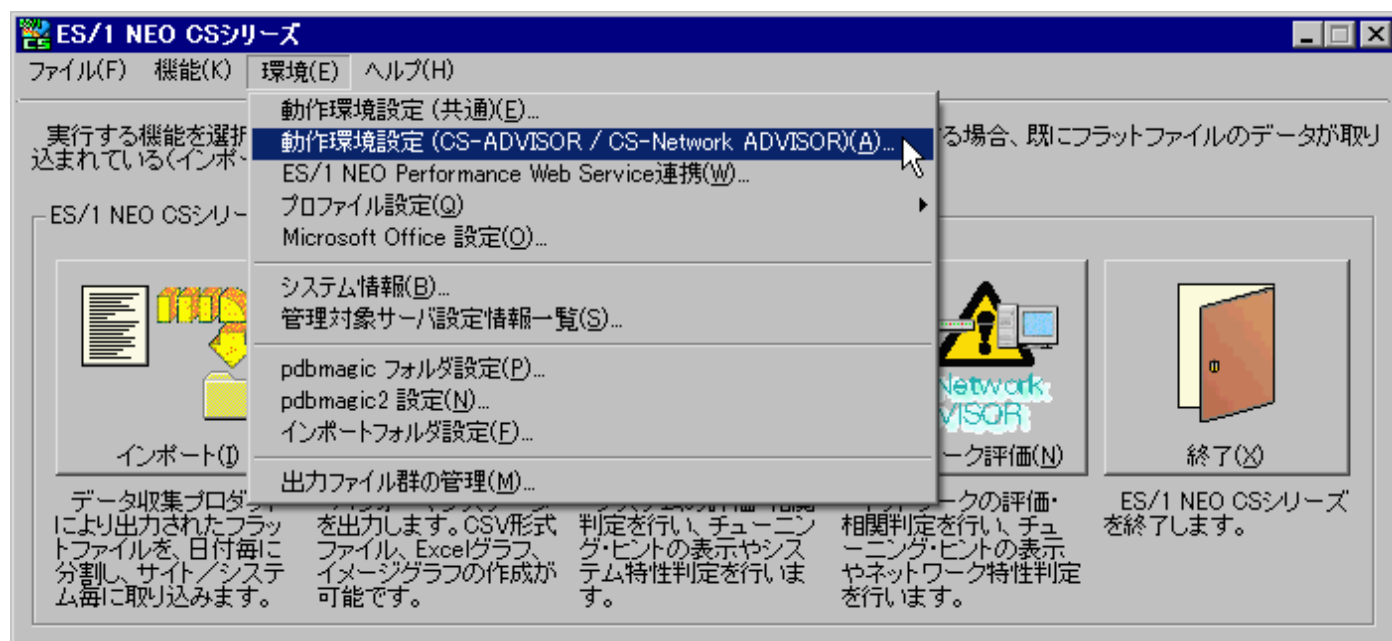
ここでの設定は、CS-MAGIC／CS-ADVISOR／CS-Network ADVISOR で共用します。

詳細については、別紙マニュアル「CS-MAGIC 使用者の手引き 7.3.8. インポートフォルダ設定」を参照してください。

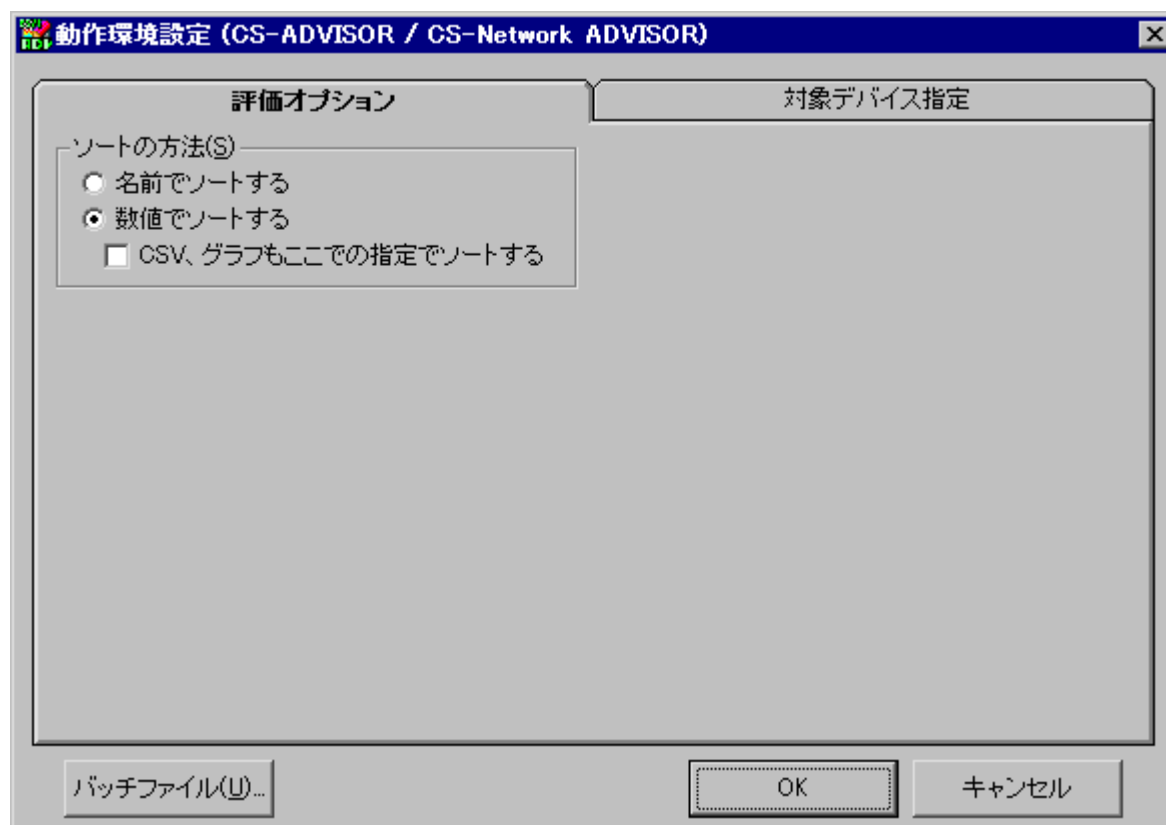
### 1.3.5. 動作環境設定 (CS-ADVISOR/CS-Network ADVISOR)

CS-ADVISOR/CS-Network ADVISOR が使用する環境設定を行います。

起動は、「環境(E)」メニューの「動作環境設定(CS-ADVISOR/CS-Network ADVISOR)(A)...」を選択します。



「動作環境設定(CS-ADVISOR/CS-Network ADVISOR)(A)...」を選択すると、「動作環境設定(CS-ADVISOR/CS-Network ADVISOR)」画面が表示されます。



(1)評価オプションタブ



①ソートの方法(S)

システムのリソースの中には、ディスク装置のように同一のリソースが複数存在するものがあります。それらの情報をソートする際のキー項目を指定します。ソートは項目の名前順、または平均値の降順で行います。初期値は「数値でソート」です。

「CSV、グラフもここでの指定でソートする」をチェックすると、評価結果ファイルの表示順と CS-ADVISOR で出力される CSV 形式ファイル、およびグラフファイルの表示順を合わせることができます。

## (2)対象デバイス指定タブ

The screenshot shows a Windows-style dialog box titled "動作環境設定 (CS-ADVISOR / CS-Network ADVISOR)". It has two tabs: "評価オプション" (Evaluation Options) and "対象デバイス指定" (Target Device Specification). The "対象デバイス指定" tab is active.

Below the tabs, there is explanatory text: "CS-ADVISORでの評価実行時、評価の対象とするデバイスの条件をサイト／システムごとに指定します。ここで指定した条件を適用する／しないは、評価条件ファイル作成時に指定します。"

A section labeled "対象デバイスの指定／除外(L)" contains a table with five columns: "サイト名" (Site Name), "システム名" (System Name), "デバイス名" (Device Name), "種別" (Type), and "条件" (Condition). The table is currently empty.

At the bottom of the dialog are four buttons: "削除(X)" (Delete), "編集(W)...", "条件追加(M)...", and "バッチファイル(B)...". At the very bottom center are "OK" and "キャンセル" (Cancel) buttons.

評価実行時、特定のデバイスのみを評価対象としたり、特定のデバイスを除外して評価したりすることができます。ここではデバイスを評価する際の条件を設定します。

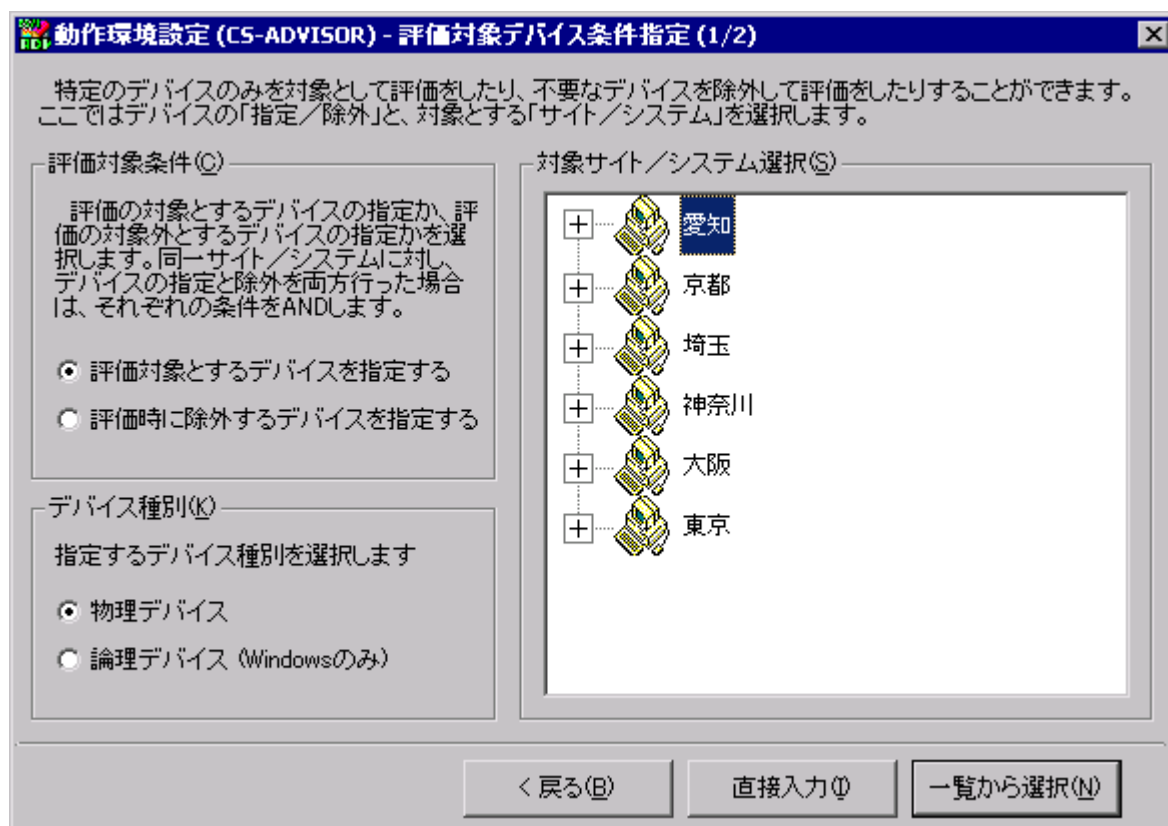
メモ！

Linux では、SCSI 以外のデバイス、または SCSI を含むすべてのデバイス情報が正常に出力されないことがあります。

これは、カーネルやドライバの不具合が原因となっています。

## ①[条件追加(M)...]ボタン

[条件追加(M)...]ボタンを押下すると「動作環境設定(CS-ADVISOR) - 評価対象デバイス条件指定(1/2)」画面が表示されます。



## ・評価対象条件(C)

評価条件を選択します。

特定デバイスのみを対象とするのか、特定デバイスを除外するのかを選択します。

## ・デバイス種別(K)

評価条件に指定するデバイスが物理デバイスなのか論理デバイスなのかを選択します。

(論理デバイスは Windows システムが対象です)

## ・対象サイト／システム選択(S)

指定した評価条件を適用するシステムを選択します。

## ・[&lt; 戻る(B)]ボタン

「動作環境設定(CS-ADVISOR / CS-Network ADVISOR)」画面に戻ります。

## ・[直接入力(I)]ボタン

「動作環境設定(CS-ADVISOR) - 評価対象デバイス名指定」画面が表示されます。

動作環境設定 (CS-ADVISOR) - 評価対象デバイス名指定

評価対象とするデバイス名を入力してください。複数のデバイス名を入力する場合は、カンマ区切りで続けて入力してください。デバイス名にはワイルドカードも指定可能です。半角1文字にマッチする「?」、任意の文字列にマッチする「\*」が指定できます。

ex. Device\_a,Device\_b,Device\_c,Device\_d\*,Device\_e???,...

デバイス名入力(D):

[対象サイト/システム]  
愛知/在庫管理DBサーバ

デバイス名:

☐ 全サイト/システムに適用する(A)    < 戻る(B)    完了(N)

ここでデバイス名を直接入力します。複数のデバイス名を入力する場合は、それぞれをカンマで区切ります。

(例)

Device\_A,Device\_B,Device\_C

デバイス名にはワイルドカードも指定可能です。半角 1 文字とマッチする「?」、任意の文字列とマッチする「\*」を指定することができます。

デバイス名入力後、[完了(N)]ボタンを押下すると登録が終了します。

「全サイト/システムに適用する(A)」をチェックした状態で[完了(N)]ボタンを押下すると、入力したデバイスの条件をすべてのサイト/システムに対し適用します。

- ・[一覧から選択(N)]ボタン

「動作環境設定(CS-ADVISOR) - 評価対象デバイス条件指定(2/2)」画面が表示されます。

ここでは、指定期間分のフラットファイルを走査し、デバイス名の一覧を表示します。走査する期間の指定は、以下の 3 種類があります。

- ・走査開始日と走査終了日を直接指定する。
- ・「動作環境設定(CS-ADVISOR) - 評価対象デバイス条件指定(1/2)」画面で選択したサイト／システムの全フラットファイルを走査対象とする。
- ・「動作環境設定(CS-ADVISOR) - 評価対象デバイス条件指定(1/2)」画面で選択したサイト／システムの最新日付データのみを走査する。



走査方法を指定し[走査開始(E)]ボタンを押下すると、走査結果がデバイス名一覧に表示されます。表示されたデバイス名の中から評価条件の対象とするデバイスを選択します。

動作環境設定 (CS-ADVISOR) - 評価対象デバイス条件指定 (2/2)

選択したサイト／システムのフラットファイルを、指定期間分走査し、デバイス名を一覧表示します。走査期間を指定し、[走査開始]ボタンを押下してください。

フラットファイル走査期間指定(I)

走査開始日 : 2003/09/01 ~ 走査終了日 : 2003/09/01

☐ 全日付を走査する  
☐ 最新日のみを走査する

デバイス名一覧(D)

- ☒ Device01
- ☒ Device02
- ☒ Device03
- ☒ Device04
- ☐ Device05
- ☐ Device06
- ☐ Device07
- ☐ Device08
- ☐ Device09
- ☐ Device10
- ☐ Device11
- ☐ Device12

全選択(A) 全解除(R) 走査開始(E)

☐ 全サイト／システムに適用する(S) < 戻る(B) 完了(N)

デバイス選択後、[完了(N)]ボタンを押下すると登録が終了します。

「全サイト／システムに適用する(S)」をチェックした状態で[完了(N)]ボタンを押下すると、選択したデバイスの条件をすべてのサイト／システムに対し適用します。

[illegible]

## ②「編集(W)...」ボタン

[編集(W)]...ボタンを押下すると「動作環境設定(CS-ADVISOR) - 評価対象デバイス名指定」画面が表示されます。

デバイス名の修正／変更を行い、[完了(N)]ボタンを押下して編集終了です。

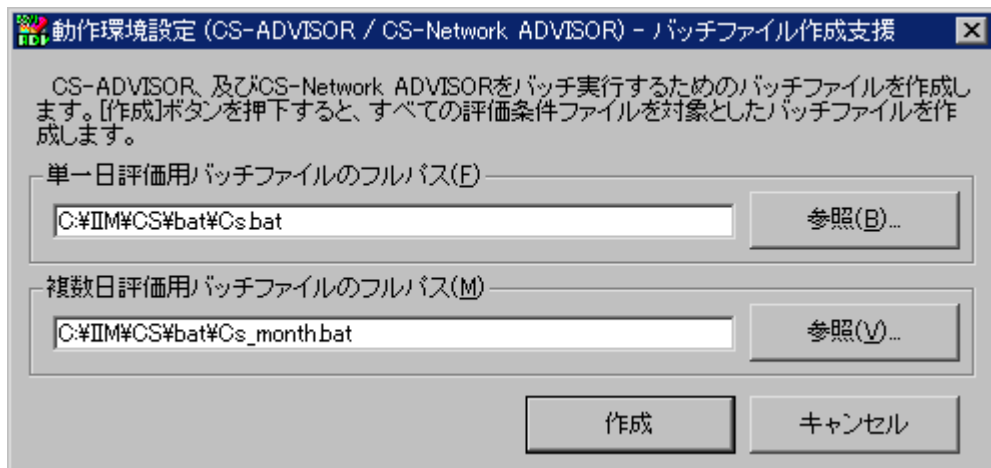
③[削除(X)]ボタン

[削除(X)]ボタンを押下すると、「対象デバイスの指定／除外(L)」欄にて選択されている条件を削除します。

### (3)[バッチファイル(U)...]ボタン

ここでは、CS-ADVISOR／CS-Network ADVISOR をバッチ実行するためのバッチファイルを作成します。すでに定義済の評価条件ファイルをすべて検索し、バッチファイルを形成します。

[バッチファイル(U)...]ボタンを押下すると、「動作環境設定 (CS-ADVISOR / CS-Network ADVISOR) – バッチファイル作成支援」画面が表示されます。



単一日評価用バッチファイルのフルパス、複数日評価用バッチファイルのフルパスを入力します。

単一日評価用バッチファイルには評価対象期間が 1 日間(24 時間未満)の評価条件が記述されます。

複数日評価用バッチファイルには評価対象期間が複数日(24 時間以上)の評価条件が記述されます。

[作成]ボタンを押下すると、次の情報を記述したファイルが出力されます(次の例は、デフォルトインストールの場合)。

```
[Cs.bat]
start /d "C:¥IIM¥CS¥" /W Cs.exe /BATADF Csadflst.txt

[Csadflst.txt]
C:¥IIM_DATA¥CS¥ADVOUT¥Site1¥System1¥csadv_site001
C:¥IIM_DATA¥CS¥ADVOUT¥Site1¥System1¥csadv_site002
C:¥IIM_DATA¥CS¥ADVOUT¥Site1¥System1¥csadv_site003
:
:
:

[Cs_month.bat]
start /d "C:¥IIM¥CS¥" /W Cs.exe /BATADF Csadflst_month.txt

[Csadflst_month.txt]
C:¥IIM_DATA¥CS¥ADVOUT¥Site2¥System2¥csadv_site001
C:¥IIM_DATA¥CS¥ADVOUT¥Site2¥System2¥csadv_site002
C:¥IIM_DATA¥CS¥ADVOUT¥Site2¥System2¥csadv_site003
:
:
:
```

これらのバッチファイルを実行すると、存在するすべての評価条件ファイルを使用し、評価を行います。

---

### 1.3.6. 出力ファイル群の管理

---

ES/1 NEO CS シリーズのメイン画面にある「環境(E)」メニューから「動作環境設定(共通)(E)...」を選択すると、「動作環境設定(共通)」画面が表示されます。

ここでの設定は、CS-MAGIC／CS-ADVISOR／CS-Network ADVISOR で共用します。

設定方法や設定内容については、別紙マニュアル「CS-MAGIC 使用者の手引き 7.3.9. 出力ファイル群の管理」を参照してください。

## 1.4. 評価条件ファイル

評価の実行は、評価条件ファイルに従って行われます。評価条件ファイルには、各種評価結果ファイルの出力先フォルダや、評価のためのオプション等が記録されています。

評価条件ファイルを、対象とするシステム毎に作成し、これを指定して評価を実行します。

評価条件ファイルは、各システムフォルダ配下に作成されます。

[評価条件ファイル名形式]

Csadv\_sitennn.xml

nnn には、001 からの通番が付与されます。

### 1.4.1. 評価条件ファイル作成

ES/1 NEO CS シリーズのメイン画面から「システム評価(A)」を選択すると「CS-ADVISOR メイン画面」が表示されます。

評価条件ファイルの情報に従い、評価を実行します。ここでは評価の実行、評価結果の閲覧、評価条件ファイルの作成/変更/削除を行います。

**処理選択(S)**

- ☐ システム評価実行  
選択された評価条件ファイルに従って評価を行います
- ☐ システム評価結果閲覧  
選択された評価条件ファイルを使用して過去に実行した評価結果を表示します
- ☒ システム評価条件ファイル新規作成  
評価を行うための評価条件ファイルを新規作成します
- ☐ システム評価条件ファイル編集  
評価を行うための評価条件ファイルを編集します

**システム評価条件ファイル一覧(L)**

評価単位	設定名	サイト名	システム名

コピー(C)...      削除(D)

**システム評価条件ファイル設定内容**

評価条件項目	設定情報

< 戻る(B)      次へ (N) >

ここで「処理選択(S)」から「システム評価条件ファイル新規作成」を選択し、[次へ (N)>]ボタンを押下すると、評価条件ファイルウィザードが開始され、「CS-ADVISOR 評価条件ファイルウィザード(1/5)」画面が表示されます。

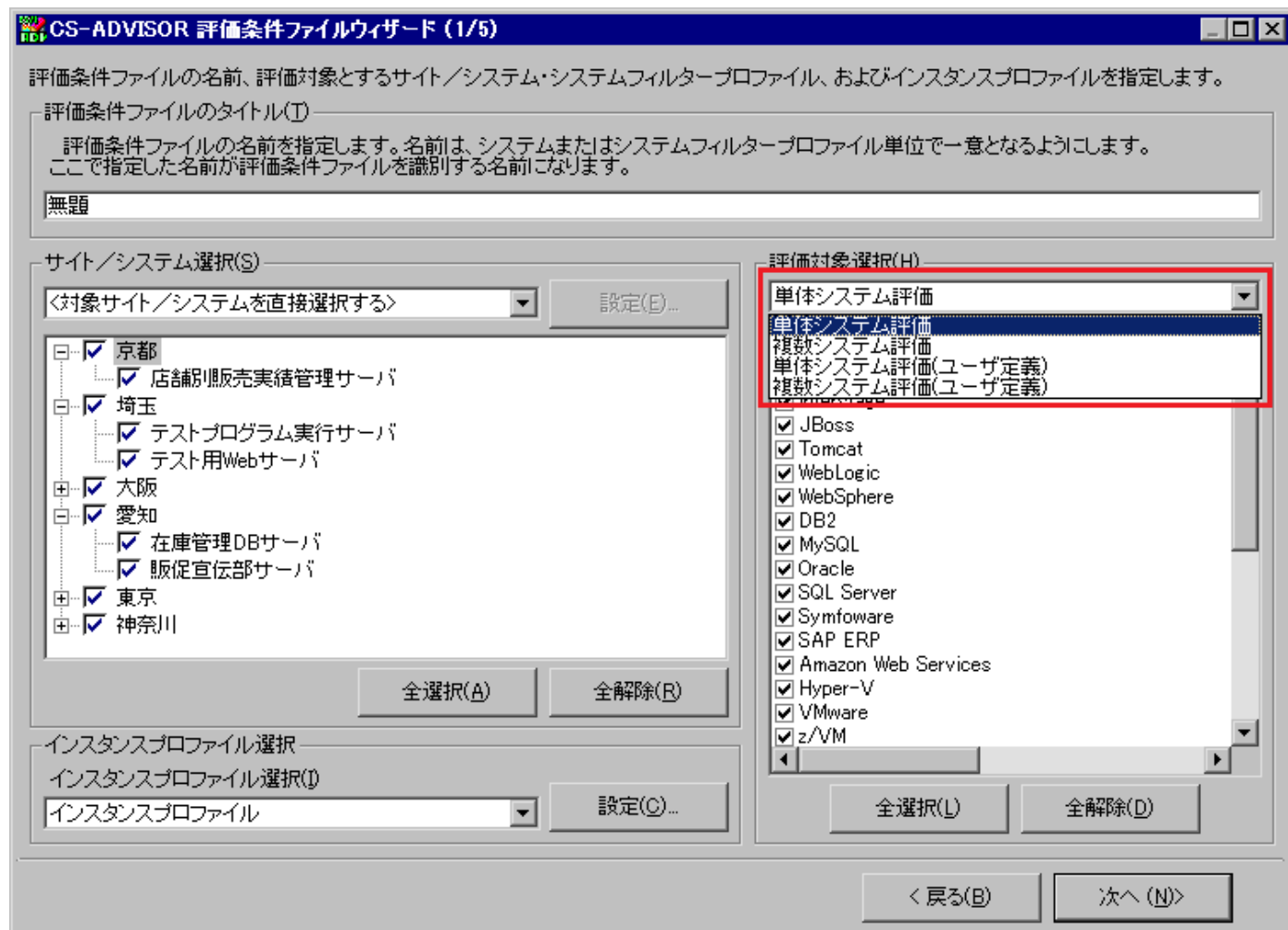
The screenshot shows the 'CS-ADVISOR 評価条件ファイルウィザード (1/5)' window. It contains several sections for configuring the evaluation condition file:

- 評価条件ファイルのタイトル(T):** A text field with '無題' (Untitled) entered. Above it is a note: '評価条件ファイルの名前を指定します。名前は、システムまたはシステムフィルタースプロファイル単位で一意となるようにします。ここで指定した名前が評価条件ファイルを識別する名前になります。'
- サイト/システム選択(S):** A tree view showing a hierarchy of locations and systems. Under '京都' (Kyoto), '店舗別販売実績管理サーバ' is selected. Under '埼玉' (Saitama), 'テストプログラム実行サーバ' and 'テスト用Webサーバ' are selected. Other locations like '大阪', '愛知', '東京', and '神奈川' are also listed with expandable arrows.
- 評価対象選択(H):** A list of system components with checkboxes. 'System' is selected. Other components include IBM i(i5), HTTP Log, Interstage, JBoss, Tomcat, WebLogic, WebSphere, DB2, MySQL, Oracle, SQL Server, Symfoware, SAP ERP, Amazon Web Services, Hyper-V, VMware, and z/VM.
- インスタンスプロファイル選択:** A section with a dropdown menu showing 'インスタンスプロファイル' and a '設定(C)...' button.

At the bottom of the window are navigation buttons: '< 戻る(B)' (Back) and '次へ (N)>' (Next).



ユーザ定義スクリプトがある場合は、下図のように評価単位を選択するコンボボックスが表示されます。



### (1) 評価条件ファイルのタイトル(T)

評価条件ファイルの名前を指定します。ここで指定した名前が評価条件ファイルを識別するキーとなります。

#### メモ！

評価条件ファイルのタイトルはフォルダ名にも利用するため「¥」や「/」など、禁則文字を指定することはできません。

### (2) サイト／システム選択(S)

評価対象とするサイト／システムを選択します。

ここでは、インポートされているフラットファイルのサイト／システムが一覧表示されます。

また、利用可能なシステムフィルタプロフィールの一覧がコンボボックスに表示されます。

#### ・<対象サイト／システムを直接選択する>

システムフィルタプロフィール名が表示されているコンボボックスで<対象サイト／システムを直接選択する>を選択した場合は、対象とするサイト／システムを直接ツリーから選択します。

#### ・システムフィルタプロフィール選択

システムフィルタプロフィール名が表示されているコンボボックスで<対象サイト／システムを直接選択する>以外を選択した場合は、対象サイト／システムの指定にシステムフィルタプロフィールを使用します。

[設定(E)...]ボタンを押下すると、「システムフィルタプロフィール一覧」画面が表示され、システムフィルタプロフィールの追加や編集を行う事ができます。

また、システムフィルタプロフィールを選択した場合は、そのシステムフィルタプロフィールに登録されているサイト／システムがツリーにプレビュー選択表示されます。

ここでの設定変更はできませんので、システムフィルタプロフィールに登録されているサイト／システムを変更する場合は、[設定(E)...]ボタンを押下して変更を行ってください。

システムフィルタプロフィールについての詳細は、別紙マニュアル「プロフィール機能 使用者の手引き」を参照してください。

### (3) インスタンスプロフィール選択

評価の種類によっては評価を実行する際に、評価対象インスタンスを絞り込むことができます。

Oracle ドメイン名／データベース名、Symfoware RDB システム名、SQL Server インスタンス名、SAP ERP インスタンス名、DB2 ノード名／データベース別名がこれに該当します。

このインスタンス情報の有効／無効を、インスタンスプロフィール情報を使用して制御する事ができます。

プロフィール情報はフラットファイルのインポート時に自動抽出されており、特別な操作をする事なく使用可能です。

プロフィール情報をカスタマイズすることにより特定のインスタンスを選択することが可能です。

#### ・インスタンスプロフィール選択(I)

使用するインスタンスプロフィールを選択します。

インスタンスプロフィールには、インポート時に自動抽出された様々な付加情報が格納されています。

選択初期値は「インスタンスプロフィール」となっており、このインスタンスプロフィールを選択すると、自動抽出されたすべてのインスタンス情報を使用して評価を行います。

[設定(C)...]ボタンを押下すると、「インスタンスプロフィール一覧」画面が表示され、インスタンスプロフィールの追加や編集を行う事ができます。

「<インスタンスプロフィールを使用しない>」を選択した場合は、評価条件ファイル作成時点のすべてのインスタンスを対象として評価を行います。

#### (4)評価対象選択(H)

評価対象とする項目を選択します。選択した項目に詳細を指定するオプションがある場合は、次の画面以降に設定画面が表示されます。

スクリプトをユーザ定義した場合は、評価種別を選択するコンボボックスが表示されます。

##### ①[全選択(L)]ボタン

全項目を選択状態にします。

##### ②[全解除(D)]ボタン

選択されている項目すべて非選択状態にします。

[次へ (N)>]ボタンを押下すると、「CS-ADVISOR 評価条件ファイルウィザード(2/5)」画面が表示されます。

「対象選択(H)」欄に詳細設定が存在する項目が表示され、選択した項目の詳細設定が画面右側に表示されます。

(5)SAP ERP 設定画面 (単一システム版/複数システム版共通)

[illegible]

①BY\_PROG

プログラム別解析を指示します。「はい」の場合解析を行い、「いいえ」の場合解析を行いません。

## ②BY\_TASK

タスクタイプ別解析を指示します。「はい」の場合解析を行い、「いいえ」の場合解析を行いません。

## ③BY TCODE

トランザクションコード別解析を指示します。「はい」の場合解析を行い、「いいえ」の場合解析を行いません。

④BY\_TERM

端末別解析を指示します。「はい」の場合解析を行い、「いいえ」の場合解析を行いません。

⑤BY TRX

トランザクション別解析を指示します。「はい」の場合解析を行い、「いいえ」の場合解析を行いません。

⑥BY USER

ユーザ別解析を指示します。「はい」の場合解析を行い、「いいえ」の場合解析を行いません。

⑦BY\_WP

ワークプロセス別解析を指示します。「はい」の場合解析を行い、「いいえ」の場合解析を行いません。

## (6)HTTP Log 設定画面

[illegible]

### ①OPT\_ExtFile

静的ファイルを解析対象外に指定します。

「はい」に設定することで、末尾が以下にマッチする URL を解析対象外として除外します。

'gif', 'jpg', 'jpeg', 'png', 'bmp', 'css', 'js', 'ico'(大文字小文字は問ず)

「はい」に設定することで、実行時間を短縮し、上記ファイルへのアクセスを除いてレスポンス統計値が得やすくなります。

HTTP ステータスコードのエラー分析(404 Not Found の洗い出し等)を目的とした評価の場合には、「いいえ」にして実行してください。「いいえ」にすると処理時間が増加します。

## ②OPT\_TopN

出力要素数の制限を指定します。

URL 別の統計値を出力する下記資源ログの出力行数を指定します。最大で 200 行まで指定可能であり、0 行を指定した場合は分析自体を行いません。

- HTTP Log の URL 別分析
  - URL 別統計レポート(合計アクセス件数順)
  - URL 別統計レポート(最大レスポンス時間順)
  - URL 別統計レポート(合計レスポンス時間順)
- HTTP Log のワースト分析
  - ワーストレスポンス
- HTTP Log のエラーコード分析
  - エラーコード(<コード>:<メッセージ>)

**③OPT\_TopN\_IP**

IP アドレスの出力要素数を指定します。

資源ログ「クライアント IP アドレス別統計レポート(IP アドレス順)」の出力行数を指定します。最大で 255 行まで指定可能であり、0 行を指定した場合は分析自体を行いません。

**④SW\_Hourly**

下記の資源ログの時刻系列を 1 時間単位に集約する指定します。

- HTTP Log の時系列分析

- 時系列サマリーレポート

- HTTP Log の時系列レスポンス度数分析

- 時系列のレスポンス時間分布(累積相対度数)

- 時系列のレスポンス時間分布(相対度数)

- 時系列のレスポンス時間分布

- HTTP Log の特定 URL 時系列分析

- URL トレースレポート<特定 URL 名>

「はい」に設定することで、1 時間インターバルに集約し資源ログおよびチューニングヒントを生成できます。1 時間インターバルに集約することで実行時間を短縮できます。

**⑤SW\_UrlTraceCnt**

URL トレース出力数を指定します。

資源ログ「URL 別統計レポート(合計アクセス件数順)」の上位 10 件内に、95 パーセンタイル・レスポンスが 3 秒を超える URL が存在した場合、別途「URL トレースレポート」を出力します。このパラメータでは、URL トレースレポートの最大の出力枚数を指定します。0 を設定すると URL トレースレポートの分析および出力を行いません。

(7)[月次]System 漸増傾向 設定画面

評価対象選択で複数システム評価が選択されている場合に表示されます。

評価時に使用するパラメータを指定します。「値」列のフィールドをダブルクリックしてください。

対象選択(H) ユーザ定義スクリプト情報(D)

[月次]System,漸増傾向

パラメータ	値	説明
ArrivalDay	365	限界値到達日数の閾値
CpuUseChk	いいえ	プロセッサ使用率の漸増チェックを行う
CpuUseCorr	0.8	プロセッサ使用率の相関係数閾値
CpuUseGraph	いいえ	プロセッサ使用率が漸増傾向以外の場合もグラフを作成する
CpuUseMax	100	プロセッサ使用率の限界値(%)
CpuUseVal	平均	プロセッサ使用率の計算方法
FileSysUseChk	はい	ファイルシステム使用率の漸増チェックを行う
FileSysUseCorr	0.8	ファイルシステム使用率の相関係数閾値
FileSysUseGraph	いいえ	ファイルシステム使用率が漸増傾向以外の場合もグラフを作成する
FileSysUseMax	100	ファイルシステム使用率の限界値(%)
FileSysUseVal	最大	ファイルシステム使用率の計算方法
FreeMemChk	いいえ	フリーメモリー量の漸増チェックを行う
FreeMemCorr	0.8	フリーメモリー量の相関係数閾値
FreeMemGraph	いいえ	フリーメモリー量が漸増傾向以外の場合もグラフを作成する
FreeMemMin	0	フリーメモリー量の限界値(MB)
FreeMemVal	最小	フリーメモリー量の計算方法

< 戻る(B) 次へ(N) >

①ArrivalDay

近似グラフの値が限界値に到達するまでの予想日数の閾値を設定します。閾値を下回ったサイト／システムは、チューニングヒントのメッセージが出力されます。

②CpuUseChk

プロセッサ使用率に関する漸増チェックを行うかどうかのフラグです。「はい」を選択した場合はチェックを行います。「いいえ」を選択した場合はチェックを行いません。

③CpuUseCorr

プロセッサ使用率と近似直線との相関係数の閾値を設定します。ここで設定した閾値より相関係数が小さい場合は、評価結果に出力しません。

④CpuUseGraph

プロセッサ使用率のチューニングヒントが出力されなかった場合でも、グラフを作成するかどうかのフラグです。「はい」を選択した場合はすべてのグラフを作成します。「いいえ」を選択した場合は漸増傾向と判断されたグラフのみを作成します。

⑤CpuUseMax

プロセッサ使用率の限界値を設定します。

## ⑥CpuUseVal

各インターバルで出力されているプロセッサ使用率を 1 日のサマリーに集約する際の計算方法を選択します。

## ⑦FileSysUseChk

ファイルシステムのスペース使用率に関する漸増チェックを行うかどうかのフラグです。「はい」を選択した場合はチェックを行います。「いいえ」を選択した場合はチェックを行いません。

## ⑧FileSysUseCorr

ファイルシステム使用率と近似直線との相関係数の閾値を設定します。ここで設定した閾値より相関係数が小さい場合は、評価結果に出力しません。

## ⑨FileSysUseGraph

ファイルシステムのスペース使用率のチューニングヒントが出力されなかった場合でも、グラフを作成するかどうかのフラグです。「はい」を選択した場合はすべてのグラフを作成します。「いいえ」を選択した場合は漸増傾向と判断されたグラフのみを作成します。

## ⑩FileSysUseMax

ファイルシステムのスペース使用率の限界値を設定します。

## ⑪FileSysUseVal

各インターバルで出力されているファイルシステムのスペース使用率を 1 日のサマリーに集約する際の計算方法を選択します。

## ⑫FreeMemChk

フリーメモリー量に関する漸減チェックを行うかどうかのフラグです。「はい」を選択した場合はチェックを行います。「いいえ」を選択した場合はチェックを行いません。

## ⑬FreeMemCorr

フリーメモリー量と近似直線との相関係数の閾値を設定します。ここで設定した閾値より相関係数が小さい場合は、評価結果に出力しません。

## ⑭FreeMemGraph

フリーメモリー量のチューニングヒントが出力されなかった場合でも、グラフを作成するかどうかのフラグです。「はい」を選択した場合はすべてのグラフを作成します。「いいえ」を選択した場合は漸減傾向と判断されたグラフのみを作成します。

## ⑮FreeMemMin

フリーメモリー量の限界値を設定します。

## ⑯FreeMemVal

各インターバルで出力されているフリーメモリー量を 1 日のサマリーに集約する際の計算方法を選択します。



## (8)[月次]VMware 漸増傾向 設定画面

評価対象選択で複数システム評価が選択されている場合に表示されます。

CS-ADVISOR 評価条件ファイルウィザード (2/5)

評価時に使用するパラメータを指定します。「値」列のフィールドをダブルクリックしてください。

対象選択(H) ユーザ定義スクリプト情報(D)

[月次]VMware漸増傾向

パラメータ	値	説明
ArrivalDay	365	限界値到達日数の閾値
DsFreeChk	はい	データストア空き容量の漸減チェックを行う
DsFreeCorr	0.8	データストア空き容量の相関係数閾値
DsFreeGraph	いいえ	データストア空き容量が漸減傾向以外の場合もグラフを作成する
DsFreeMin	0	データストア空き容量の限界値(GB)
DsFreeVal	最小	データストア空き容量の計算方法
EsxCpuUseChk	いいえ	ESXプロセッサ使用率の漸増チェックを行う
EsxCpuUseCorr	0.8	ESXプロセッサ使用率の相関係数閾値
EsxCpuUseGraph	いいえ	ESXプロセッサ使用率が漸増傾向以外の場合もグラフを作成する
EsxCpuUseMax	100	ESXプロセッサ使用率の限界値(%)
EsxCpuUseVal	平均	ESXプロセッサ使用率の計算方法
EsxMemUseChk	いいえ	ESXメモリー使用率の漸増チェックを行う
EsxMemUseCorr	0.8	ESXメモリー使用率の相関係数閾値
EsxMemUseGraph	いいえ	ESXメモリー使用率が漸増傾向以外の場合もグラフを作成する
EsxMemUseMax	90	ESXメモリー使用率の限界値(%)
EsxMemUseVal	平均	ESXメモリー使用率の計算方法
VmCpuUseChk	いいえ	VMプロセッサ使用率の漸増チェックを行う
VmCpuUseCorr	0.8	VMプロセッサ使用率の相関係数閾値
VmCpuUseGraph	いいえ	VMプロセッサ使用率が漸増傾向以外の場合もグラフを作成する
VmCpuUseMax	100	VMプロセッサ使用率の限界値(%)
VmCpuUseVal	平均	VMプロセッサ使用率の計算方法

< 戻る(B) 次へ(N) >

### ①ArrivalDay

近似グラフの値が限界値に到達するまでの予想日数の閾値を設定します。閾値を下回ったサイト／システムは、チューニングヒントのメッセージが出力されます。

### ②DsFreeChk

データストア空き容量に関する漸減チェックを行うかどうかのフラグです。「はい」を選択した場合はチェックを行います。「いいえ」を選択した場合はチェックを行いません。

### ③DsFreeCorr

データストア空き容量と近似直線との相関係数の閾値を設定します。  
ここで設定した閾値より相関係数が小さい場合は、評価結果に出力しません。

### ④DsFreeGraph

データストア空き容量のチューニングヒントが出力されなかった場合でも、グラフを作成するかどうかのフラグです。「はい」を選択した場合はすべてのグラフを作成します。「いいえ」を選択した場合は漸減傾向と判断されたグラフのみを作成します。

### ⑤DsFreeMin

データストア空き容量の限界値を設定します。

## ⑥DsFreeVal

各インターバルで出力されているデータストア空き容量を 1 日のサマリーに集約する際の計算方法を選択します。

## ⑦EsxCpuUseChk

ESX プロセッサ使用率に関する漸増チェックを行うかどうかのフラグです。「はい」を選択した場合はチェックを行います。「いいえ」を選択した場合はチェックを行いません。

## ⑧EsxCpuUseCorr

ESX プロセッサ使用率と近似直線との相関係数の閾値を設定します。  
ここで設定した閾値より相関係数が小さい場合は、評価結果に出力しません。

## ⑨EsxCpuUseGraph

ESX プロセッサ使用率のチューニングヒントが出力されなかった場合でも、グラフを作成するかどうかのフラグです。「はい」を選択した場合はすべてのグラフを作成します。「いいえ」を選択した場合は漸増傾向と判断されたグラフのみを作成します。

## ⑩EsxCpuUseMax

ESX プロセッサ使用率の限界値を設定します。

## ⑪EsxCpuUseVal

各インターバルで出力されている ESX プロセッサ使用率を 1 日のサマリーに集約する際の計算方法を選択します。

## ⑫EsxMemUseChk

ESX メモリー使用率に関する漸増チェックを行うかどうかのフラグです。「はい」を選択した場合はチェックを行います。「いいえ」を選択した場合はチェックを行いません。

## ⑬EsxMemUseCorr

ESX メモリー使用率と近似直線との相関係数の閾値を設定します。  
ここで設定した閾値より相関係数が小さい場合は、評価結果に出力しません。

## ⑭EsxMemUseGraph

ESX メモリー使用率のチューニングヒントが出力されなかった場合でも、グラフを作成するかどうかのフラグです。「はい」を選択した場合はすべてのグラフを作成します。「いいえ」を選択した場合は漸増傾向と判断されたグラフのみを作成します。

## ⑮EsxMemUseMax

ESX メモリー使用率の限界値を設定します。

## ⑯EsxMemUseVal

各インターバルで出力されている ESX メモリー使用率を 1 日のサマリーに集約する際の計算方法を選択します。

## ⑰VmCpuUseChk

VM プロセッサ使用率に関する漸増チェックを行うかどうかのフラグです。「はい」を選択した場合はチェックを行います。「いいえ」を選択した場合はチェックを行いません。

## ⑱VmCpuUseCorr

VM プロセッサ使用率と近似直線との相関係数の閾値を設定します。  
ここで設定した閾値より相関係数が小さい場合は、評価結果に出力しません。

## ⑲VmCpuUseGraph

VM プロセッサ使用率のチューニングヒントが出力されなかった場合でも、グラフを作成するかどうかのフラグです。「はい」を選択した場合はすべてのグラフを作成します。「いいえ」を選択した場合は漸増傾向と判断されたグラフのみを作成します。

## ⑳VmCpuUseMax

VM プロセッサ使用率の限界値を設定します。

## ㉑VmCpuUseVal

各インターバルで出力されている VM プロセッサ使用率を 1 日のサマリーに集約する際の計算方法を選択します。

(11)[日次]ピーク日との比較 設定画面

評価対象選択で「[日次]ピーク日との比較」が選択されている場合に表示されます。

評価時に使用するパラメータを指定します。「値」列のフィールドをダブルクリックしてください。

対象選択(H)

ユーザ定義スクリプト情報(D)

パラメータ	値	説明
BackupNum	5	ピーク記録ファイルのバックアップ数
FileMail	stdproc%s_PeekComp#conf#Mail.ini	メール定義ファイル
OutputDir	stdproc%s_PeekComp#out	結果ファイル出力先フォルダ
PeekDir	stdproc%s_PeekComp#LimitDef	ピーク記録ファイル出力先フォルダ
PwsServerIP	localhost	PWSサーバのIPアドレス
SwStdCpu90P	いゝえ	【標準】90P プロセッサ使用率
SwStdCpuAvg	はい	【標準】平均プロセッサ使用率
SwStdCpuMax	いゝえ	【標準】最大プロセッサ使用率
SwStdMemAvg	いゝえ	【標準】平均メモリー使用率
SwStdMemMax	はい	【標準】最大メモリー使用率

< 戻る(B)      次へ(N) >

①BackupNum

ピーク記録ファイルのバックアップ保存数を設定します。保存数以上のピーク記録ファイルは、評価実行時に自動的に削除されます。

②FileMail

メール定義ファイルのファイル名を設定します。メール定義ファイルの定義方法の詳細については、別紙マニュアル「CS Scripting Interface 使用者の手引き」の「2.4.7. メール送信」を参照してください。

③OutputDir

結果ファイルの出力先フォルダを設定します。

④Peek Dir

ピーク日記録ファイルの出力先フォルダを設定します。

⑤PwsServerIP

Performance Web Service サーバの IP アドレス、または、ホスト名を設定します。ここで設定された Performance Web Service サーバの IP アドレスは、結果ファイルのヘッダ部に Performance Web Service の URL として記載されます。

**⑥SwStdCpu90P**

標準提供している、「90P プロセッサ使用率」についてのピーク日比較処理を行うかを選択するフラグです。この項目についての評価を行う場合は、「はい」を選択します。

**⑦SwStdCpuAvg**

標準提供している、「平均プロセッサ使用率」についてのピーク日比較処理を行うかを選択するフラグです。この項目についての評価を行う場合は、「はい」を選択します。

**⑧SwStdCpuMax**

標準提供している、「最大プロセッサ使用率」についてのピーク日比較処理を行うかを選択するフラグです。この項目についての評価を行う場合は、「はい」を選択します。

**⑨SwStdMemAvg**

標準提供している、「平均メモリー使用率」についてのピーク日比較処理を行うかを選択するフラグです。この項目についての評価を行う場合は、「はい」を選択します。

**⑩SwStdMemMax**

標準提供している、「最大メモリー使用率」についてのピーク日比較処理を行うかを選択するフラグです。この項目についての評価を行う場合は、「はい」を選択します。

## (12) ユーザ定義スクリプト設定画面

ユーザ定義スクリプトが選択されており、且つパラメータ設定項目が存在する場合に表示されます。

ユーザ定義スクリプトについての詳細は別紙マニュアル「CS Scripting Interface 使用者の手引き」を参照してください。

[illegible]

### ①対象選択(H)

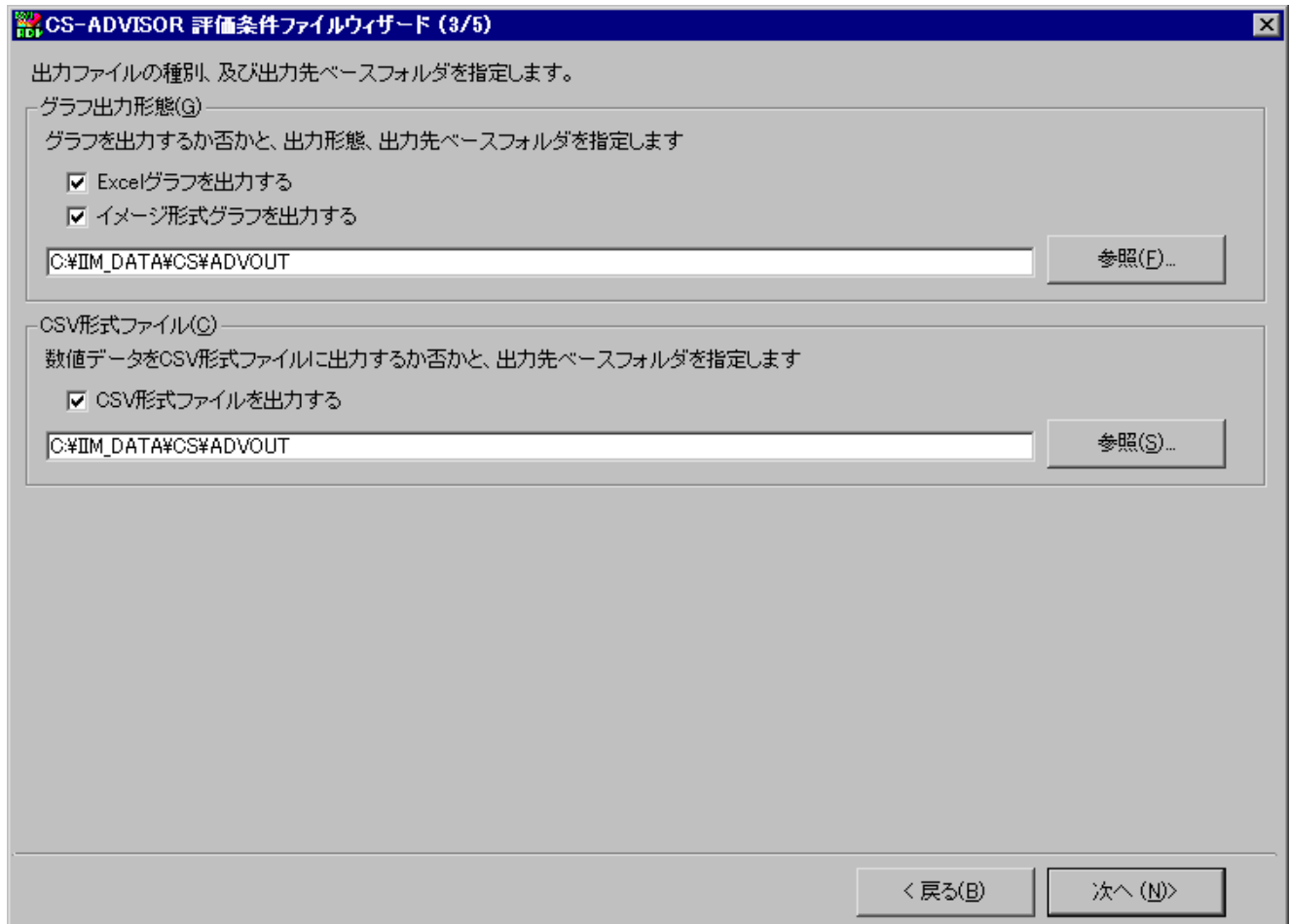
「CS-ADVISOR 評価条件ファイルウィザード (1/5)」画面で選択したユーザ定義スクリプトの中で、パラメータ設定項目が存在するスクリプトが表示されます。

## ②ユーザ定義スクリプト情報(D)

スクリプトに定義されているパラメータの一覧が表示されます。

「値」列のセルをダブルクリック、または[F2]キーを押下することにより値の編集が可能です。この時に表示されるコンボボックス内の選択候補は、スクリプトで定義されている内容です。

「次へ (N)>」ボタンを押下すると、「CS-ADVISOR 評価条件ファイルウィザード(3/5)」画面が表示されます。



### (13) グラフ出力形態(G)

評価を実行した際、グラフを出力することができます。グラフは、Microsoft Excel 形式のグラフと、イメージ形式グラフ (GIF/PNG) の2種が用意されています。どちらかの形式、または両方の形式で出力します。

グラフを出力する場合は、出力先フォルダのパスを指定します。

「日時」フォルダ配下にグラフファイルが出力されます。

#### **注意！**

System、HTTP Log、WebLogic、WebSphere、Interstage、JBoss、Tomcat、MySQL、SQL Server、z/VM、VMware、Hyper-V、IBM i(i5)、NetApp のデータを評価する場合に「Excel グラフを出力する」や「イメージ形式グラフを出力」を指定しても、関連するグラフは作成されません。これらのデータに関するグラフ作成が必要な場合は、CS-MAGIC を使用してください。

**(14)CSV 形式ファイル(C)**

評価を実行した際、数値データを CSV 形式ファイルに出力することができます。

CSV 形式ファイルを出力する場合は、出力先フォルダのパスを指定します。

「日時」フォルダ配下に CSV 形式ファイルが出力されます。

**注意！**

System、HTTP Log、WebLogic、WebSphere、Interstage、JBoss、Tomcat、MySQL、SQL Server、z/VM、VMware、Hyper-V、IBM i(i5)、NetApp のデータを評価する場合に「CSV 形式ファイルを出力する」を指定しても、関連する CSV 形式ファイルは作成されません。これらのデータに関するグラフ作成が必要な場合は、CS-MAGIC を使用してください。

[次へ (N)>]ボタンを押下すると、「CS-ADVISOR 評価条件ファイルウィザード(4/5)」画面が表示されます。



## (15)評価対象期間設定

評価対象とする期間(開始日 開始時刻 ～ 終了日 終了時刻)を指定します。

CS-ADVISOR 評価条件ファイルウィザード (4/5)

ファイル作成対象とする日時の範囲を指定します。対象日の自動設定も可能です。

集約データの指定(B)

- ☒ 未集約フラットファイルが対象
- ☐ Flatfile Maintenance データ集約 - 日毎集約機能で作成したフラットファイルが対象
- ☐ Flatfile Maintenance データ集約 - 月毎集約機能で作成したフラットファイルが対象

開始日時

対象期間の開始日と開始時刻を指定します。日付を固定としない場合は、ファイル作成を実行したコンピュータのシステム日付を基準とした相対日となります。

年(Y) 月(M) 日(D)

- ☒ 実行年の  年前
- ☐ 固定年
- ☒ 実行月の  ヶ月前
- ☐ 固定月
- ☒ 実行日の  日前
- ☐ 固定日

開始時刻  :

実データ一覧(O)...

終了日時

対象期間の終了日と終了時刻を指定します。終了日には、開始日に指定した日を基準とした相対日も指定する事ができます。

☐ 開始日を基準として終了日を指定する(S)

年(E) 月(G) 日(P)

- ☒ 実行年の
- ☐ 開始日の  年前
- ☐ 固定年
- ☒ 実行月の
- ☐ 開始日の  ヶ月前
- ☐ 固定月
- ☒ 実行日の
- ☐ 開始日の  日前
- ☐ 固定日

終了時刻  :

実データ一覧(V)...

☐ 評価実行時に対象日時の指定を行う(A)

対象日時の指定方法については、別紙マニュアル「CS-MAGIC 使用者の手引き 7.7.1. クエリーグループ新規作成」の「(5)クエリー追加」にある「CS-MAGIC 対象期間設定」画面の説明を参照してください。

「評価実行時に対象日時の指定を行う(A)」をチェックすると、ここでは対象日時の指定を行わず、評価実行時に対象日時を指定します。詳細については後述の「1.5.1. 評価実行手順」を参照してください。

**注意！**

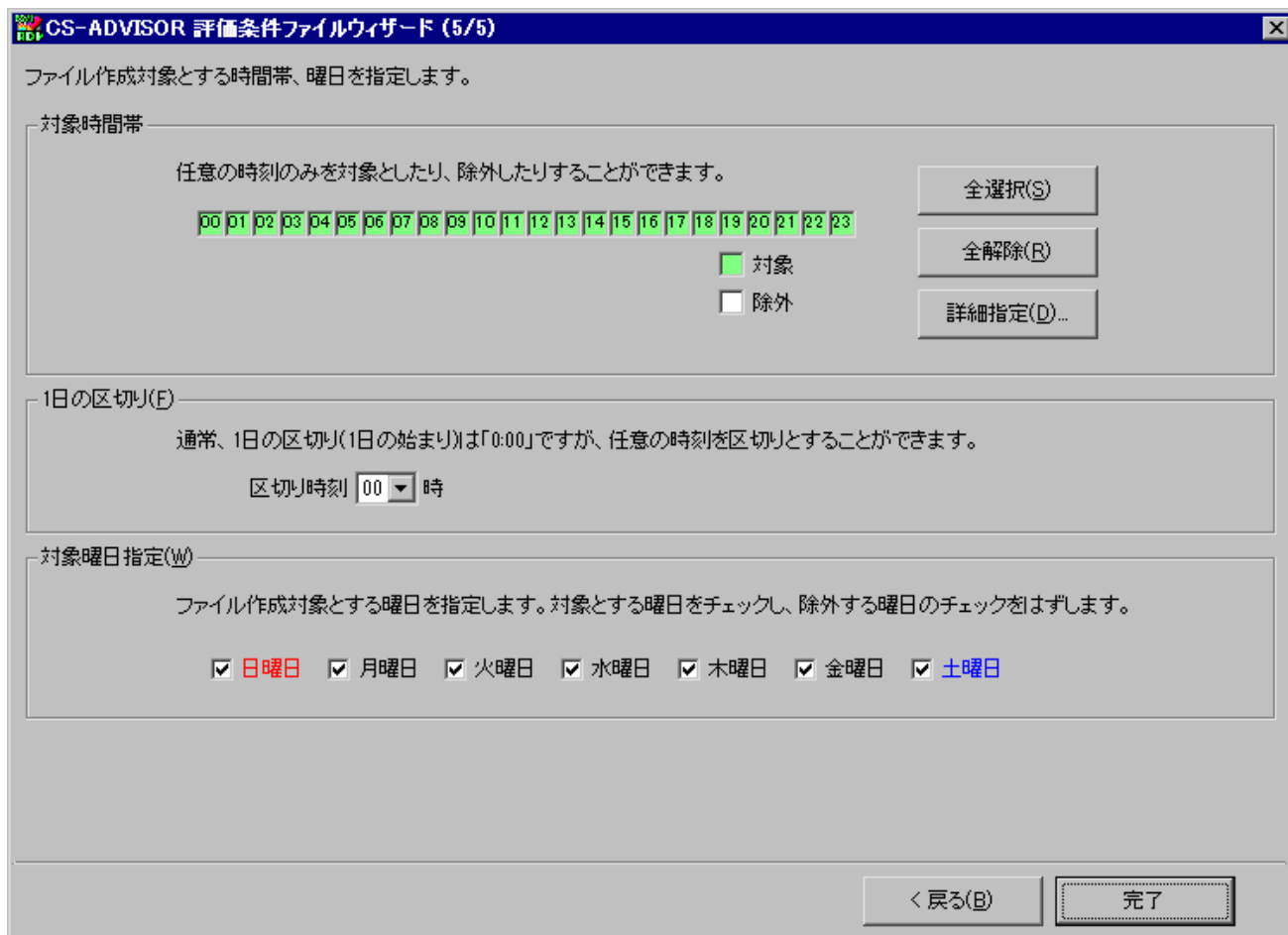
「評価実行時に対象日時の指定を行う(A)」をチェックした評価条件ファイルは、対象日時が固定でないため、バッチ実行時には使用できません。

システムフィルタープロファイルを使用している場合、「評価実行時に対象日時の指定を行う(A)」は使用できません。

[次へ (N) >] ボタンを押下すると、「CS-ADVISOR 評価条件ファイルウィザード(5/5)」画面が表示されます。

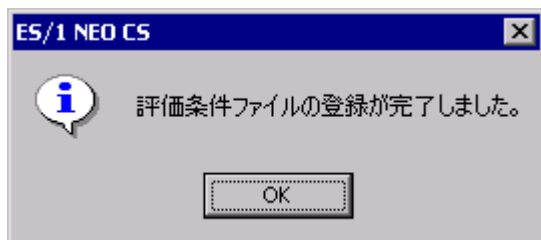
## (16)対象時間帯・対象曜日

評価対象とする時間帯、および曜日を指定します。



対象時間帯／曜日の指定方法については、別紙マニュアル「CS-MAGIC 使用者の手引き 7.7.1. クエリーグループ新規作成」の「(5)クエリー追加」にある「CS-MAGIC 対象時間帯・対象曜日設定」画面の説明を参照してください。

[完了]ボタンを押下すると、CS-ADVISOR 評価条件ファイルウィザードが完了し、評価条件ファイルが選択したサイト／システムフォルダ配下に出力されます。



上記メッセージの[OK]ボタンを押下すると、「CS-ADVISOR メイン画面」に戻り、登録した評価条件ファイルのサイト、システム、タイトルが「システム評価条件ファイル一覧(L)」に表示されます。

## 1.4.2. 評価条件ファイル編集

The screenshot displays the CS-ADVISOR Main Screen with the following components:

- Header:** CS-ADVISOR メイン画面
- Left Panel (処理選択(S)):** Contains four radio button options:
  - ☒ システム評価実行: 選択された評価条件ファイルに従って評価を行います
  - ☐ システム評価結果閲覧: 選択された評価条件ファイルを使用して過去に実行した評価結果を表示します
  - ☐ システム評価条件ファイル新規作成: 評価を行うための評価条件ファイルを新規作成します
  - ☐ システム評価条件ファイル編集: 評価を行うための評価条件ファイルを編集します
- Right Panel (システム評価条件ファイル一覧(L)):** A table listing evaluation condition files.

評価単位	設定名	サイト名	システム名
単体評価	無題	愛知	在庫管理DBサーバ

Buttons: コピー(C)... and 削除(D)
- Bottom Panel (システム評価条件ファイル設定内容):** A table showing settings for the selected file.

評価条件項目	設定情報
評価対象システム	愛知/在庫管理DBサーバ
評価対象日時	2017年8月1日 00:00 ~ 2017年8月1日 23:59
対象曜日	すべて
対象時間帯	時間帯指定なし
一日の区切り時間	0時
CSV形式ファイル出力	する
CSV形式ファイル出力ベースフォルダ	C:\MIM_DATA\CS\ADVOUT\愛知\在庫管理DBサーバ\無題
グラフファイル出力	する
グラフファイル出力形態	GIF, Excel
グラフファイル出力ベースフォルダ	C:\MIM_DATA\CS\ADVOUT\愛知\在庫管理DBサーバ\無題
CPU搭載数	1

Buttons: < 戻る(B) and 評価実行

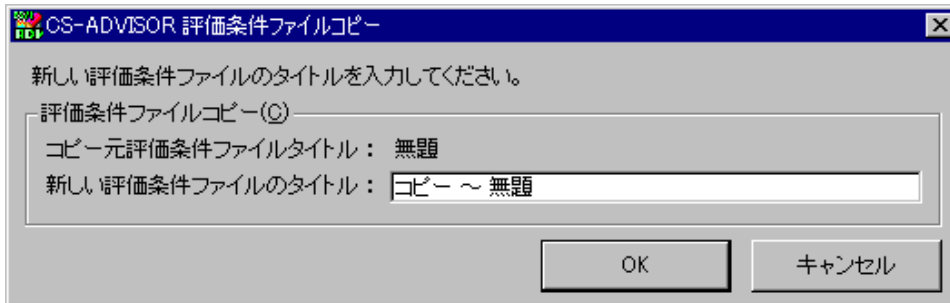
「システム評価条件ファイル一覧(L)」から変更する評価条件ファイルを選択し、「処理選択(S)」から「システム評価条件ファイル編集」を選択します。[次へ (N)>]ボタンを押下すると、評価条件ファイルウィザードが開始され、「CS-ADVISOR 評価条件ファイルウィザード(1/5)」画面が表示されます。

CS-ADVISOR 評価条件ファイルウィザードの各画面では、選択した評価条件ファイルに設定されている内容を初期表示します。各画面の使用方法は、評価条件ファイルの新規作成時と同様です。本紙マニュアル「1.4.1. 評価条件ファイル作成」を参照してください。

### 1.4.3. 評価条件ファイルコピー

「CS-ADVISOR メイン画面」の「システム評価条件ファイル一覧(L)」からコピーする評価条件ファイルを選択し、[コピー(C)...] ボタンを押下します。

新しい評価条件ファイルのタイトルを入力する画面が表示されます。



ここで新しい評価条件ファイル名を入力し、[OK]ボタンを押下すると、評価条件ファイルが保存されます。

### 1.4.4. 評価条件ファイル削除

「CS-ADVISOR メイン画面」の「システム評価条件ファイル一覧(L)」から削除する評価条件ファイルを選択し(複数選択可)、[削除(D)]ボタンを押下します。

## 1.5. 評価実行

### 1.5.1. 評価実行手順

評価の実行は、評価条件ファイルに従って行われます。

「CS-ADVISOR メイン画面」の「システム評価条件ファイル一覧(L)」から、作成した評価条件ファイルを選択し、「処理選択(S)」欄から「システム評価実行」を選択します。

The screenshot displays the 'CS-ADVISOR メイン画面' (Main Screen). On the left, the '処理選択(S)' (Process Selection) section has four radio buttons: 'システム評価実行' (selected), 'システム評価結果閲覧', 'システム評価条件ファイル新規作成', and 'システム評価条件ファイル編集'. The main area is titled 'システム評価条件ファイル一覧(L)' (System Evaluation Condition File List) and contains a table with columns: '評価単位' (Evaluation Unit), '設定名' (Setting Name), 'サイト名' (Site Name), and 'システム名' (System Name). The first row shows '単体評価' (Individual Evaluation), '無題' (Untitled), '愛知' (Aichi), and '在庫管理DBサーバ' (Inventory Management DB Server). Below the table are 'コピー(C)...' and '削除(D)' buttons. At the bottom, the 'システム評価条件ファイル設定内容' (System Evaluation Condition File Setting Content) section shows a list of settings like '評価対象システム' (Evaluation Target System) and '評価対象日時' (Evaluation Target Date/Time), with their respective values. At the very bottom, there are '< 戻る(B)' and '評価実行' (Execute Evaluation) buttons.

[評価実行]ボタンを押下すると、評価を開始します。

評価条件ファイルを作成する際、対象日時指定で「評価実行時に対象日時の指定を行う(A)」をチェックした場合は「CS-ADVISOR 対象日時指定」画面が表示されます。

ここで評価対象とする期間を指定します。「評価対象期間(C)」欄で開始日時、終了日時をそれぞれ指定します。実際に存在するフラットファイルを検索することもできます。開始日時は、[実データ一覧(B)...]ボタン、終了日時は、[実データ一覧(V)...]ボタンを押下します。

評価対象とする期間を指定してください。

評価条件ファイル情報

サイト : 愛知  
システム : 在庫管理DBサーバ  
設定名 : 無題  
評価単位 : 単体評価

評価対象期間(C)

開始日 開始時刻 終了日 終了時刻  
2008/02/01 00 : 00 ~ 2008/02/01 23 : 59

実データ一覧(B)... 実データ一覧(V)...

OK キャンセル

「CS-ADVISOR 実データ一覧」画面が表示されます。

「日付(D)」欄に実在するフラットファイルの日付一覧が、「時刻(T)」欄に選択されている日のフラットファイルにある全インターバルが表示されます。

ここで開始日時、終了日時をそれぞれ選択すると、「CS-ADVISOR 対象日時指定」画面の「評価対象期間(C)」欄に日時がセットされます。

開始日時を選択してください

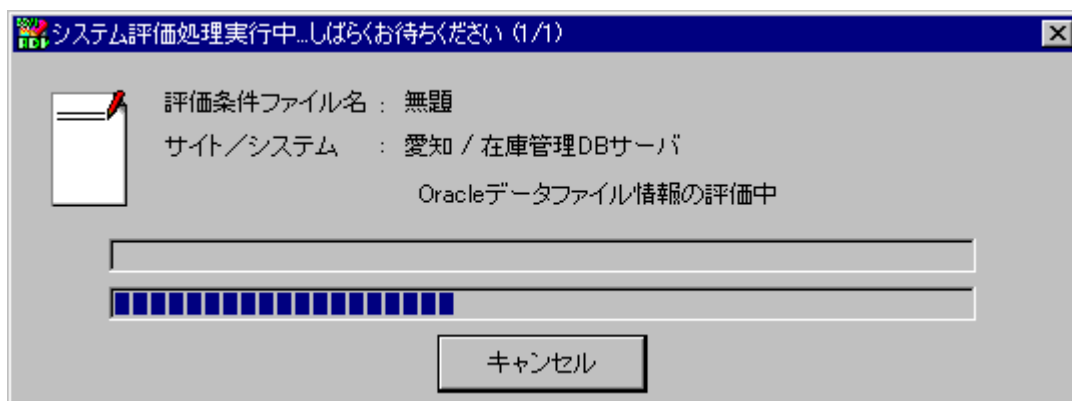
実データ一覧

日付(D)	時刻(T)
2007/08/01	00:00
2007/08/02	00:15
2007/08/03	00:30
2007/08/04	00:45
2007/08/05	01:00
	01:15
	01:30
	01:45
	02:00
	02:15
	02:30
	02:45
	03:00
	03:15
	03:30
	03:45
	04:00
	04:15
	04:30
	04:45
	05:00
	05:15
	05:30
	05:45
	06:00

OK キャンセル

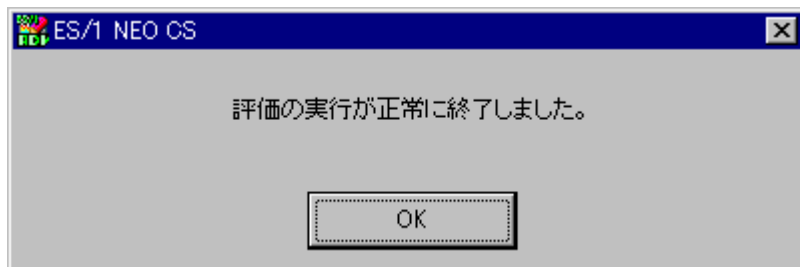
対象期間指定と設定内容変更完了後、[OK]ボタンを押下すると評価処理が開始されます。

評価処理が開始され、進捗状況がプログレスバーに表示されます。

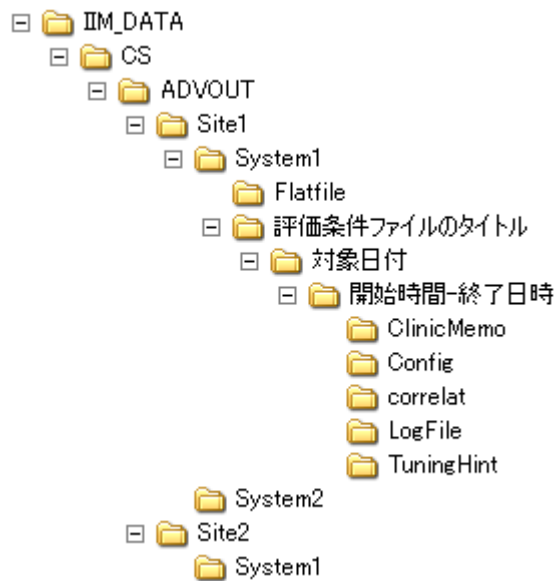


[キャンセル]ボタンを押下すると、評価処理を中断することができます。

すべての評価処理が終了すると、評価完了のメッセージが表示され、これに応答すると「CS-ADVISOR メイン画面」に戻ります。



評価結果ファイル群は、以下のフォルダに出力されます(下記ツリーは対象サイト／システムを直接選択している場合の例です)。



【対象サイト／システムを直接選択している場合】

[チューニングヒント]

x:¥IIM\_DATA¥CS¥ADVOUT¥Site¥System¥評価条件名¥対象日付¥開始時間-終了日時¥TuningHint

[資源毎のチューニングヒント]

x:¥IIM\_DATA¥CS¥ADVOUT¥Site¥System¥評価条件名¥対象日付¥開始時間-終了日時¥ClinicMemo

[ログファイル]

x:¥IIM\_DATA¥CS¥ADVOUT¥Site¥System¥評価条件名¥対象日付¥開始時間-終了日時¥LogFile

[グラフファイル]

x:¥IIM\_DATA¥CS¥ADVOUT¥Site¥System¥評価条件名¥対象日付¥開始時間-終了日時

[CSV 形式ファイル]

x:¥IIM\_DATA¥CS¥ADVOUT¥Site¥System¥評価条件名¥対象日付¥開始時間-終了日時

【システムフィルタースプロファイルを使用している場合】

[チューニングヒント]

x:¥IIM\_DATA¥CS¥ADVOUT¥,prof¥評価条件名¥Site¥System¥対象日付¥開始時間-終了日時¥TuningHint

[資源毎のチューニングヒント]

x:¥IIM\_DATA¥CS¥ADVOUT¥,prof¥評価条件名¥Site¥System¥対象日付¥開始時間-終了日時¥ClinicMemo

[ログファイル]

x:¥IIM\_DATA¥CS¥ADVOUT¥,prof¥評価条件名¥Site¥System¥対象日付¥開始時間-終了日時¥LogFile

[グラフファイル]

x:¥IIM\_DATA¥CS¥ADVOUT¥,prof¥評価条件名¥Site¥System¥対象日付¥開始時間-終了日時

[CSV 形式ファイル]

x:¥IIM\_DATA¥CS¥ADVOUT¥,prof¥評価条件名¥Site¥System¥対象日付¥開始時間-終了日時



評価結果ファイル名とその内容を以下に示します(評価結果ファイル名の拡張子は「.txt」、CSV 形式ファイルでは「.csv」、グラフファイルは「.xls、.xlsx」または「.gif、.png」となります)。

**【チューニングヒント】**

ファイル名	説明
csht	チューニングヒント(テキストファイルのみ)
import	重要度
correlat	相関度

**【資源毎のチューニングヒント】**

ファイル名	説明
s_cprocessor	プロセッサ
s_cstorage	メモリー
s_ciosub	I/O
s_cdiskdpc	ディスクスペース
s_cnetwork	ネットワーク・アダプター
s_csqlsvr	SQL Server
s_http_hint	HTTP Log
s_websphere (Server 名)	WebSphere
s_weblogic (Server 名)	WebLogic
s_interstage(ワークユニット名)	Interstage
s_jboss	JBoss
s_tomcat	Tomcat
s_mysql	MySQL
s_i5_hint	IBM i (i5)
s_esx_cpu	プロセッサ(ESX ホスト)
s_vm_cpu	プロセッサ(仮想マシン)
s_esx_mem	メモリー(ESX ホスト)
s_vm_mem	メモリー(仮想マシン)
s_esx_disk	I/O サブシステム(ESX ホスト)
s_vm_disk	I/O サブシステム(仮想マシン)
s_esx_net	ネットワーク(ESX ホスト)
s_vm_net	ネットワーク(仮想マシン)
s_ds	データストア
s_hv_cpu_host	プロセッサ(Hyper-V)
s_hv_mem_host	メモリー(Hyper-V)
s_hv_storage_host	ストレージ(Hyper-V)
s_hv_net_host	ネットワーク(Hyper-V)
s_hv_cpu_partition	プロセッサ(パーティション)
s_zvm	IBM z/VM
s_cpu	NetApp プロセッサ
s_wafl	NetApp WAFL

ファイル名	説明
s_volume	NetApp ボリューム
s_Increase(CpuUse)	プロセッサ使用率の漸増傾向
s_Increase(FreeMem)	フリーメモリー量の漸増傾向
s_Increase(FileSysUse)	ファイルシステムのスペース使用率の漸増傾向
x_任意	ユーザ定義では自由なファイル名を指定できます。

【ログファイル】

ファイル名	説明
s_sysinfo	システム情報
s_process	プロセッサ
s_storage	メモリー
s_iosub	I/O
s_fileacc	ファイルアクセス
s_diskspc	ディスクスペース
s_actcmd	コマンド
s_actusr	ユーザ
s_actusrcd	ユーザ・コマンド
s_network	ネットワーク・アダプター
s_Oracle({0})interSummary	Oracle({0})のインターバルサマリー ( {0}はインスタンス名)
s_Oracle({0})buffer	Oracle({0})のバッファ分析 ( {0}はインスタンス名)
s_Oracle({0})sharedPool	Oracle({0})の共有プール分析 ( {0}はインスタンス名)
s_Oracle({0})redoLog	Oracle({0})の Redo ログ分析 ( {0}はインスタンス名)
s_Oracle({0})sort	Oracle({0})のソート分析 ( {0}はインスタンス名)
s_Oracle({0})sessSummary	Oracle({0})のセッション別要約 ( {0}はインスタンス名)
s_Oracle({0})sessCpubz	Oracle({0})のセッション別プロセッサ ( {0}はインスタンス名)
s_Oracle({0})sessMem	Oracle({0})のセッション別メモリー ( {0}はインスタンス名)
s_Oracle({0})sessConget	Oracle({0})のセッション別コンシステント GET ( {0}はインスタンス名)
s_Oracle({0})sessDbget	Oracle({0})のセッション別データベース GET ( {0}はインスタンス名)
s_Oracle({0})sessScnCnt	Oracle({0})のセッション別スキャン数 ( {0}はインスタンス名)
s_Oracle({0})sessScnBlks	Oracle({0})のセッション別スキャンブロック数 ( {0}はインスタンス名)
s_Oracle({0})sessLngScn	Oracle({0})のセッション別ロングスキャン数 ( {0}はインスタンス名)
s_Oracle({0})sessRedoSz	Oracle({0})のセッション別 Redo サイズ ( {0}はインスタンス名)
s_Oracle({0})dfIo	Oracle({0})のデータファイル別アクセス回数 ( {0}はインスタンス名)
s_Oracle({0})dfRead	Oracle({0})のデータファイル別読み込みアクセス回数 ( {0}はインスタンス名)
s_Oracle({0})dfWrite	Oracle({0})のデータファイル別書き込みアクセス回数 ( {0}はインスタンス名)
s_sql_<n>	SQL Server のサマリー (nは連番)
s_sqllgf_<n>	SQL Server のログファイル (nは連番)
s_sqluser_<n>	SQL Server のユーザ (nは連番)

ファイル名	説明
s_sqlcache_<n>	SQL Server のキャッシュ (n は連番)
s_sqldb_<n>	SQL Server のデータベース (n は連番)
s_symfware({0})interSummary	Symfware({0})のインターバルサマリー ({0}はインスタンス名)
s_symfware({0})usrSummary	Symfware({0})のユーザ別要約 ({0}はインスタンス名)
s_symfware({0})user_{1}	Symfware({0})のユーザ分析({1}) ({0}はインスタンス名、{1}は番号)
s_symfware({0})bufSummary	Symfware({0})の共有バッファ別要約 ({0}はインスタンス名)
s_symfware({0})buf_{1}	Symfware({0})の共有バッファ分析({1}) ({0}はインスタンス名、{1}番号)
s_symfware({0})dbspcSummary	Symfware({0})の DB スペース別要約 ({0}はインスタンス名)
s_symfware({0})dbspc_{1}	Symfware({0})の DB スペース分析({1}) ({0}はインスタンス名、{1}は番号)
s_DB2instSummary	DB2 のインスタンス別要約
s_DB2({0})interSummary	DB2({0})のインターバルサマリー ({0}はインスタンス名)
s_DB2({0})buffSummary	DB2({0})のバッファプール別要約 ({0}はインスタンス名)
s_DB2({0})buff_{1}	DB2({0})のバッファプール分析({1}) ({0}はインスタンス名、{1}はバッファプール名)
s_DB2({0})tblSpcSummary	DB2({0})のテーブルスペース別要約
s_DB2({0})tblspc_{1}	DB2({0})のテーブルスペース分析({1}) ({0}はインスタンス名、{1}はテーブルスペース名)
s_DB2({0})AplSummary	DB2({0})のアプリケーション別要約 ({0}はインスタンス名)
s_DB2({0})apl_{1}	DB2({0})のアプリケーション分析({1}) ({0}はインスタンス名、{1}はアプリケーション名)
s_SAP({0})shortDump	SAP({0})のショートダンプ報告 ({0}はインスタンス名)
s_SAP({0})sysTrxCnt	SAP({0})のシステム別トランザクション数分析 ({0}はインスタンス名)
s_SAP({0})sysLoginCnt	SAP({0})のシステム別ログイン数 ({0}はインスタンス名)
s_SAP({0})sysMemory{n}	SAP({0})のメモリ分析 ({0}はインスタンス名、{1}は採番)
s_SAP({0})sysResp95p	SAP({0})のシステム別レスポンス時間分析 ({0}はインスタンス名)
s_SAP({0})interSummaryALL	SAP({0})の時系列分析(ALL) ({0}はインスタンス名)
s_SAP({0})interSummaryDialog	SAP({0})の時系列分析(Dialog) ({0}はインスタンス名)
s_SAP({0})interSummaryBatch	SAP({0})の時系列分析(Batch) ({0}はインスタンス名)
s_SAP({0})interSummaryRFC	SAP({0})の時系列分析(RFC) ({0}はインスタンス名)
s_SAP({0})worstRespDialog	SAP({0})のワーストレスポンス分析(Dialog) ({0}はインスタンス名)
s_SAP({0})worstRespBatch	SAP({0})のワーストレスポンス分析(Batch) ({0}はインスタンス名)
s_SAP({0})worstRespRFC	SAP({0})のワーストレスポンス分析(RFC) ({0}はインスタンス名)
s_SAP({0})worstRespOther	SAP({0})のワーストレスポンス分析(Other) ({0}はインスタンス名)
s_SAP({0})trxSumPROG	SAP({0})のプログラム別要約 ({0}はインスタンス名)
s_SAP({0})trxSumWPNO	SAP({0})のワークプロセス別要約 ({0}はインスタンス名)
s_SAP({0})trxSumTRX_D	SAP({0})の対話型トランザクション別要約 ({0}はインスタンス名)
s_SAP({0})trxSumTRX_A	SAP({0})のトランザクション別要約 ({0}はインスタンス名)
s_SAP({0})trxSumTCODE	SAP({0})のトランザクションコード別要約 ({0}はインスタンス名)

ファイル名	説明
s_SAP({0})trxSumtaskTypeName	SAP({0})のタスクタイプ別要約 ( {0}はインスタンス名)
s_SAP({0})trxSumUSER	SAP({0})のユーザ別要約 ( {0}はインスタンス名)
s_SAP({0})trxSumTERM	SAP({0})の端末別要約( {0}はインスタンス名)
s_http_intervalSummaryReport	HTTP Log の時系列分析
s_http_intervalHisgramReport	HTTP Log の時系列レスポンス度数分析
s_http_urlSummaryReport	HTTP Log の URL 別分析
s_http_urlTraceReport	HTTP Log の特定 URL 時系列分析
s_http_ipSummaryReport	HTTP Log のクライアント IP 別分析
s_http_worstResponseReport	HTTP Log のワースト分析
s_http_errorCodeSummaryReport	HTTP Log のエラーコード分析

ファイル名	説明
s_http_correlationAnalysisReport	HTTP Log の相関分析
s_http_regressivePredictionReport	HTTP Log の回帰予測分析
s_http_configurationReport	HTTP Log の構成
s_websphere (Server 名)	WebSphere
s_weblogic (Server 名)	WebLogic
s_interstage(ワークユニット名)	Interstage
s_jboss	JBoss
s_tomcat	Tomcat
s_mysql_config	MySQL 設定
s_mysql_cache	MySQL メモリ
s_mysql_innodb	MySQL InnoDB
s_mysql_myisam	MySQL MyISAM
s_mysql_activity	MySQL アクティビティ
s_mysql_connect	MySQL 接続
s_dc_host_config	構成表・基本(ESX ホスト)
s_dc_hosthba_config	構成表・ストレージアダプタ(ESX ホスト)
s_dc_hostnic_config	構成表・ネットワークアダプタ(ESX ホスト)
s_dc_cluster_config	構成表・基本(クラスタ)
s_dc_clustercpu_config	構成表・プロセッサ(クラスタ)
s_dc_clustermem_config	構成表・メモリー(クラスタ)
s_dc_pool_config	構成表・基本(リソースプール)
s_dc_poolcpu_config	構成表・プロセッサ(リソースプール)
s_dc_poolmem_config	構成表・メモリー(リソースプール)
s_dc_cpu	プロセッサ(データセンタ)
s_esx_cpu_summary	プロセッサ・サマリ (ESX ホスト)
s_esx_cpu	プロセッサ・使用量 (ESX ホスト)
s_vm_cpu_summary	プロセッサ・サマリ (仮想マシン)

ファイル名	説明
s_vm_pcpu	プロセッサ・物理(仮想マシン)
s_vm_vcpu	プロセッサ・仮想(仮想マシン)
s_dc_mem	メモリー(データセンタ)
s_esx_mem_usage	メモリー・使用量(ESX ホスト)
s_esx_mem_swap	メモリー・Swap(ESX ホスト)
s_esx_mem_vmmemctl	メモリー・Balloon(ESX ホスト)
s_vm_mem_usage	メモリー・使用量(仮想マシン)
s_vm_mem_swap	メモリー・Swap(仮想マシン)
s_vm_mem_vmmemctl	メモリー・Balloon(仮想マシン)
s_esx_disk_iousage	ディスク・I/O 使用量(ESX ホスト)
s_vm_disk_iousage	ディスク・I/O 使用量(仮想マシン)
s_esx_disk_iocommands	ディスク・I/O コマンド量(ESX ホスト)
s_vm_disk_iocommands	ディスク・I/O コマンド量(仮想マシン)
s_esx_disk_iolatency	ディスク・I/O レイテンシ(ESX ホスト)
s_esx_ds_iolatency	データストア・I/O レイテンシ(ESX ホスト)
s_vm_ds_iolatency	データストア・I/O レイテンシ(仮想マシン)
s_esx_adapter_iolatency	ストレージアダプタ・I/O レイテンシ(ESX ホスト)
s_esx_path_iolatency	ストレージパス・I/O レイテンシ(ESX ホスト)
s_vm_vdisk_iolatency	仮想ディスク・I/O レイテンシ(仮想マシン)
s_esx_net	ネットワーク(ESX ホスト)
s_vm_net	ネットワーク(仮想マシン)
s_ds	データストア
s_migration	マイグレーション
s_storage	ストレージ(データストア)
s_vmstorage	ストレージ(仮想マシン)
s_hv_config_host	構成表・基本(Hyper-V)
s_hv_config_hvvm	構成表・基本(パーティション)
s_hv_cpu_hvhost	プロセッサ(全体)
s_hv_lcpu	プロセッサ(論理)
s_hv_cpu_partition	プロセッサ(パーティション)
s_hv_mem_hvmemory	メモリー(全体)
s_hv_mem_dynamic_memory	メモリー(ダイナミックメモリ)
s_hv_storage_pdisk	ストレージ(物理ディスク)
s_hv_storage_ldisk	ストレージ(論理ディスク)
s_hv_storage_videcontroller	ストレージ(仮想 IDE コントローラ)
s_hv_storage_vstgdevice	ストレージ(仮想ストレージデバイス)
s_hv_net_rootif	ネットワーク(ルートパーティション)
s_hv_net_vswitch	ネットワーク(仮想スイッチ)
s_hv_net_vnic	ネットワーク(仮想ネットワークアダプタ)
s_hv_net_legacy_nic	ネットワーク(レガシーネットワークアダプタ)

ファイル名	説明
s_hv_net_vswitch_port	ネットワーク(仮想スイッチポート)
s_i5_detail	IBM i の構成情報
s_i5_sys	IBM i の概要
s_i5_sum	IBM i のインターバルサマリー
s_i5_cpu	IBM i のプロセッサ
s_i5_disk	IBM i のディスク
s_i5_disk_by_asp	IBM i のディスク (ASP 別)
s_i5_pool	IBM i のプール
s_i5_pool_by_pool	IBM i のプール (プール別)
s_i5_job	IBM i のジョブ
s_i5_job_by_ssys	IBM i のジョブ (サブシステム別)
s_i5_job_by_pool	IBM i のジョブ (プール別)

ファイル名	説明
s_detail	IBM z/VM プロセッサ・ストレージ情報
s_guest_summary	IBM z/VM ゲスト・サマリー情報
s_guest_trace	IBM z/VM ゲスト稼動状況
s_interval1	IBM z/VM インターバル・サマリー情報
s_interval2	IBM z/VM 実行効率情報
s_lparproc	IBM z/VM 論理分割プロセッサ使用状況
s_scheduler	IBM z/VM スケジューラ情報
s_userpage	IBM z/VM ユーザ・ページング状況
s_userproc	IBM z/VM ユーザ別プロセッサ使用状況
s_userstg	IBM z/VM ユーザ別主記憶使用状況
s_config	NetApp 構成表
s_system	NetApp システム
s_cpu	NetApp プロセッサ
s_wafl	NetApp WAFL
s_aggr	NetApp アグリゲート
s_volume	NetApp ボリューム
s_Increase(CpuUse)	プロセッサ使用率の漸増傾向
s_Increase(FreeMem)	フリーメモリー量の漸増傾向
s_Increase(FileSysUse)	ファイルシステムのスペース使用率の漸増傾向
s_zabbix	Zabbix レポート
x_任意	ユーザ定義では自由なファイル名を指定できます。

## 1.6. 評価結果閲覧

評価結果閲覧は、評価実行によって出力されたテキストファイルを開き、内容を閲覧する機能です。

CSV 形式ファイルやグラフファイルも外部アプリケーション(それぞれの拡張子に関連付けられたアプリケーション)を起動して閲覧することができます。

### 1.6.1. 評価結果ファイル閲覧手順

「CS-ADVISOR メイン画面」の「システム評価条件ファイル一覧(L)」から、表示したい評価結果ファイルの作成に使用した評価条件ファイルを選択します。そして「処理選択(S)」欄から「システム評価結果閲覧」を選択し、[次へ(N)>]ボタンを押下すると、「CS-ADVISOR 評価結果閲覧 - 評価結果選択」画面が表示されます。

システムフィルタープロファイルを使用している場合は、閲覧するサイト／システムを選択する画面が先に表示されます。

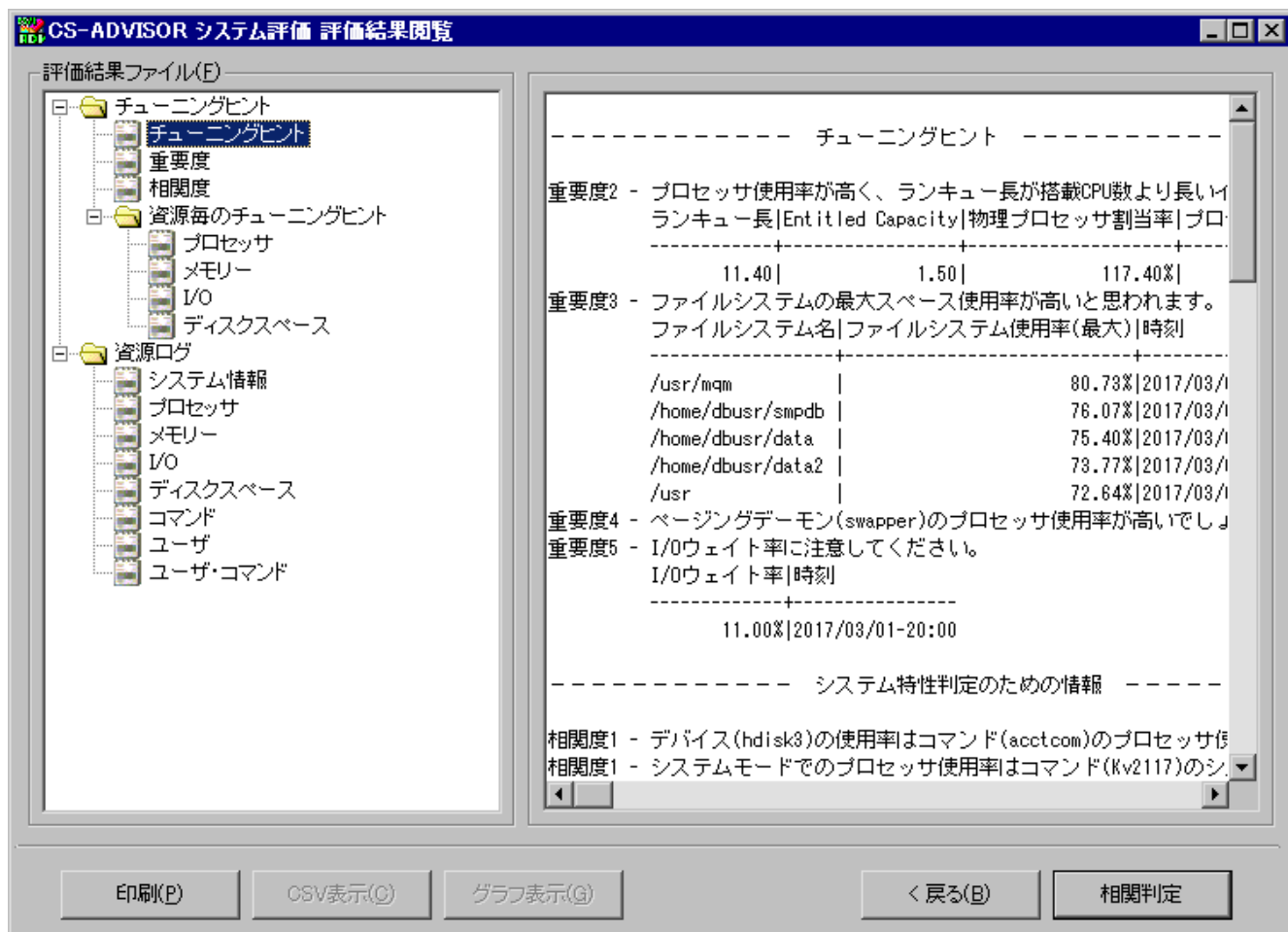
[illegible]

「CS-ADVISOR メイン画面」で選択した評価条件ファイルを使用して、評価を実行した結果が一覧表示されます。



## (1) 閲覧する日付／時刻の選択

「CS-ADVISOR 評価結果閲覧 - 評価結果選択」画面の「評価対象日付 / 時刻(D)」欄から閲覧したい評価結果の日付／時刻を選択し、[次へ (N)>]ボタンを押下すると「CS-ADVISOR 評価結果閲覧」画面が表示されます。



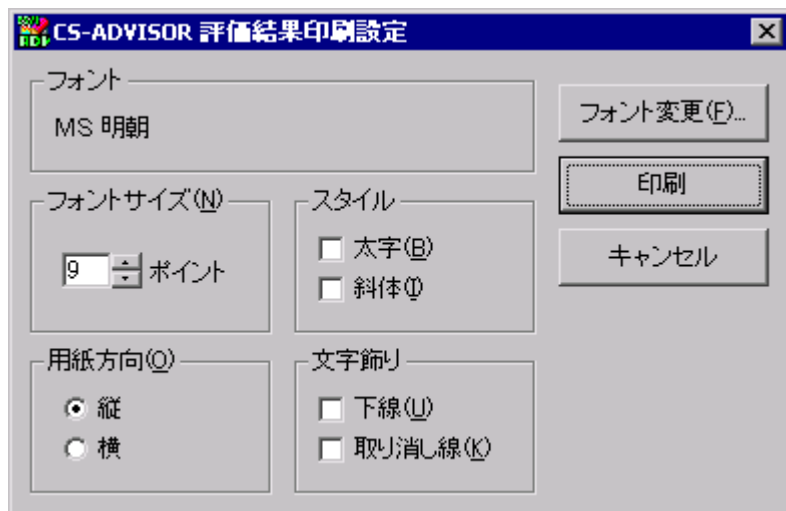
「評価結果ファイル(F)」欄に、出力された評価結果ファイルの項目がツリー表示されます。ここで表示する項目を選択すると、右側の表示欄にテキスト形式で出力された評価結果ファイルを表示します。

この画面は、最大化して閲覧することや、ウィンドウフレームをマウスでドラッグし、ウィンドウサイズを変更することができます。



①[印刷(P)]ボタン

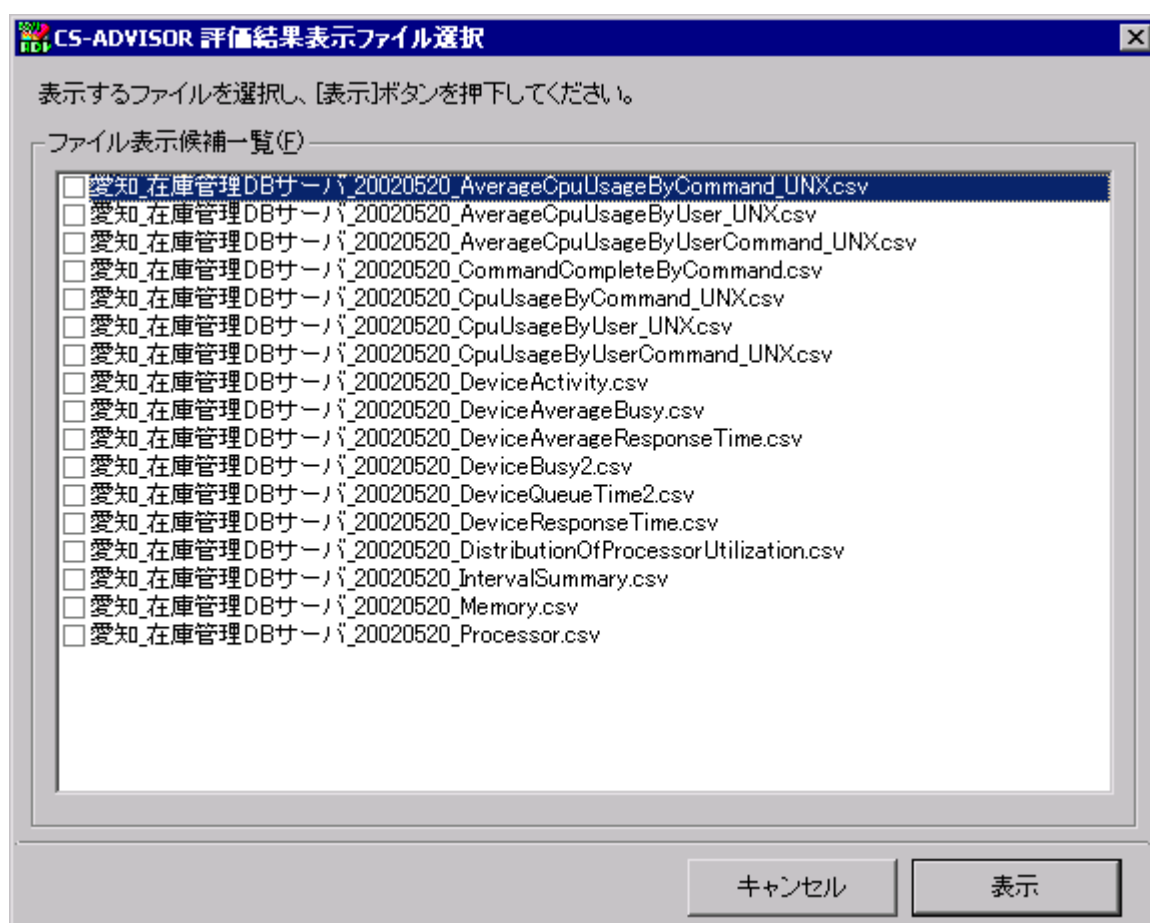
[印刷(P)]ボタンを押下すると、「CS-ADVISOR 評価結果印刷設定」画面が表示されます。



ここで[印刷]ボタンを押下すると、「通常使うプリンタに設定」されているプリンタを使用して表示内容を印刷します。「CS-ADVISOR 評価結果閲覧」画面は、文字入力が可能となっており、ユーザが入力した文字もそのまま印刷されます。[フォント変更(F)...]ボタンを押下すると印刷フォントを変更することができます。

## ②[CSV 表示(C)]ボタン

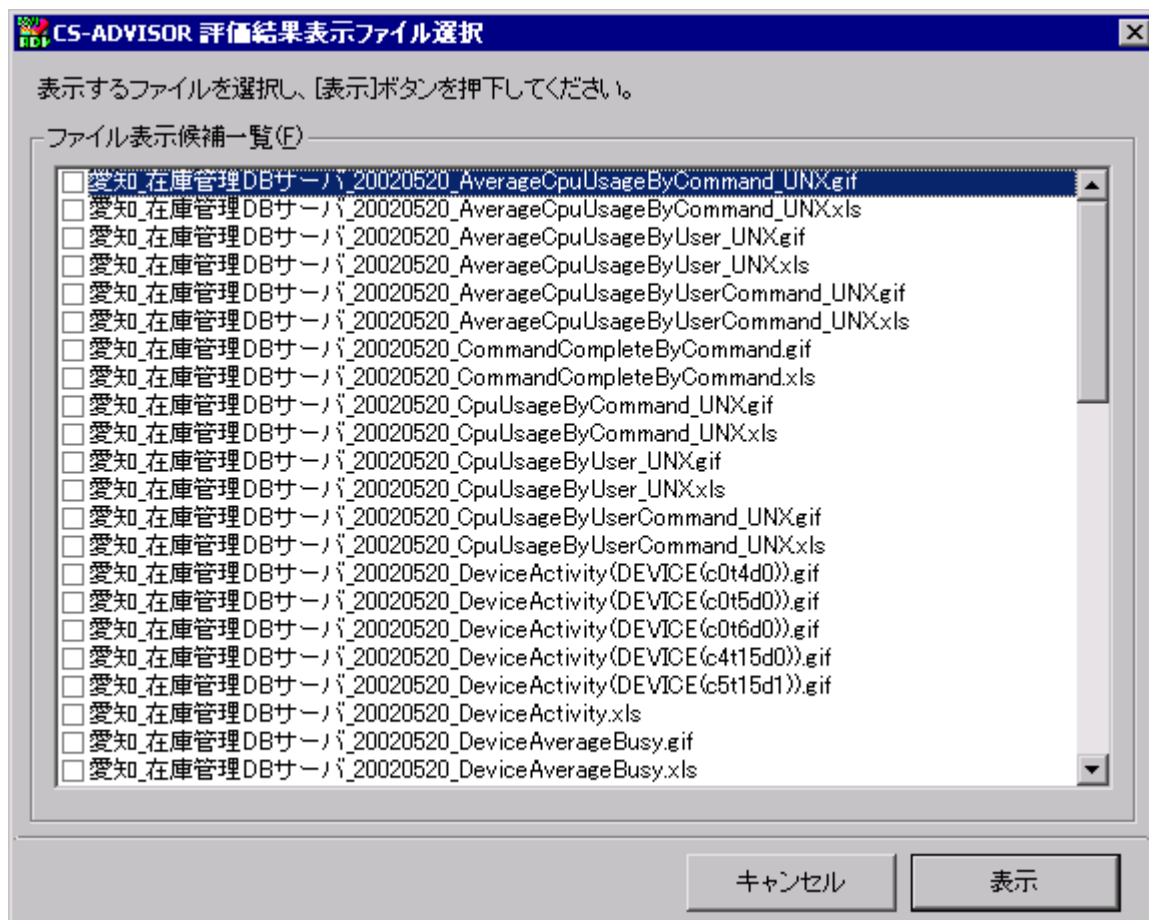
[CSV 表示(C)]ボタンを押下すると、「CS-ADVISOR 評価結果表示ファイル選択」画面が表示されます。



「ファイル表示候補一覧(F)」欄に、出力された CSV 形式ファイル名の一覧が表示されます。ここで表示する CSV 形式ファイルをチェックし、[表示]ボタンを押下すると、拡張子「.csv」に関連付けされているアプリケーションを起動し、ファイルを表示します。

## ③[グラフ表示(G)]ボタン

[グラフ表示(G)]ボタンを押下すると、「CS-ADVISOR 評価結果表示ファイル選択」画面が表示されます。



「ファイル表示候補一覧(F)」に、出力されたグラフのファイル名一覧が表示されます。ここで表示するグラフファイルをチェックし、[表示]ボタンを押下すると、拡張子「.xls、.xlsx」のファイルは Microsoft Excel を、拡張子「.gif」のファイルは関連付けされているアプリケーションを起動し、ファイルを表示します。

## ④[&lt; 戻る(B)]ボタン

「CS-ADVISOR 評価結果閲覧 - 評価結果選択」画面に戻ります。

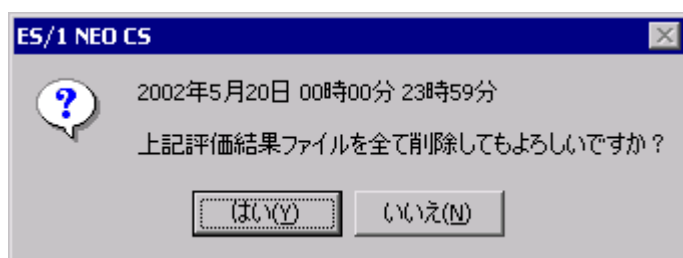
## ⑤[関連判定]ボタン

[関連判定]ボタンを押下すると、「CS-ADVISOR 関連判定ナビゲーション」画面が表示されます。

「CS-ADVISOR 関連判定ナビゲーション」画面については、本紙マニュアル「1.7. 関連判定」を参照してください。

## (2) 評価結果削除

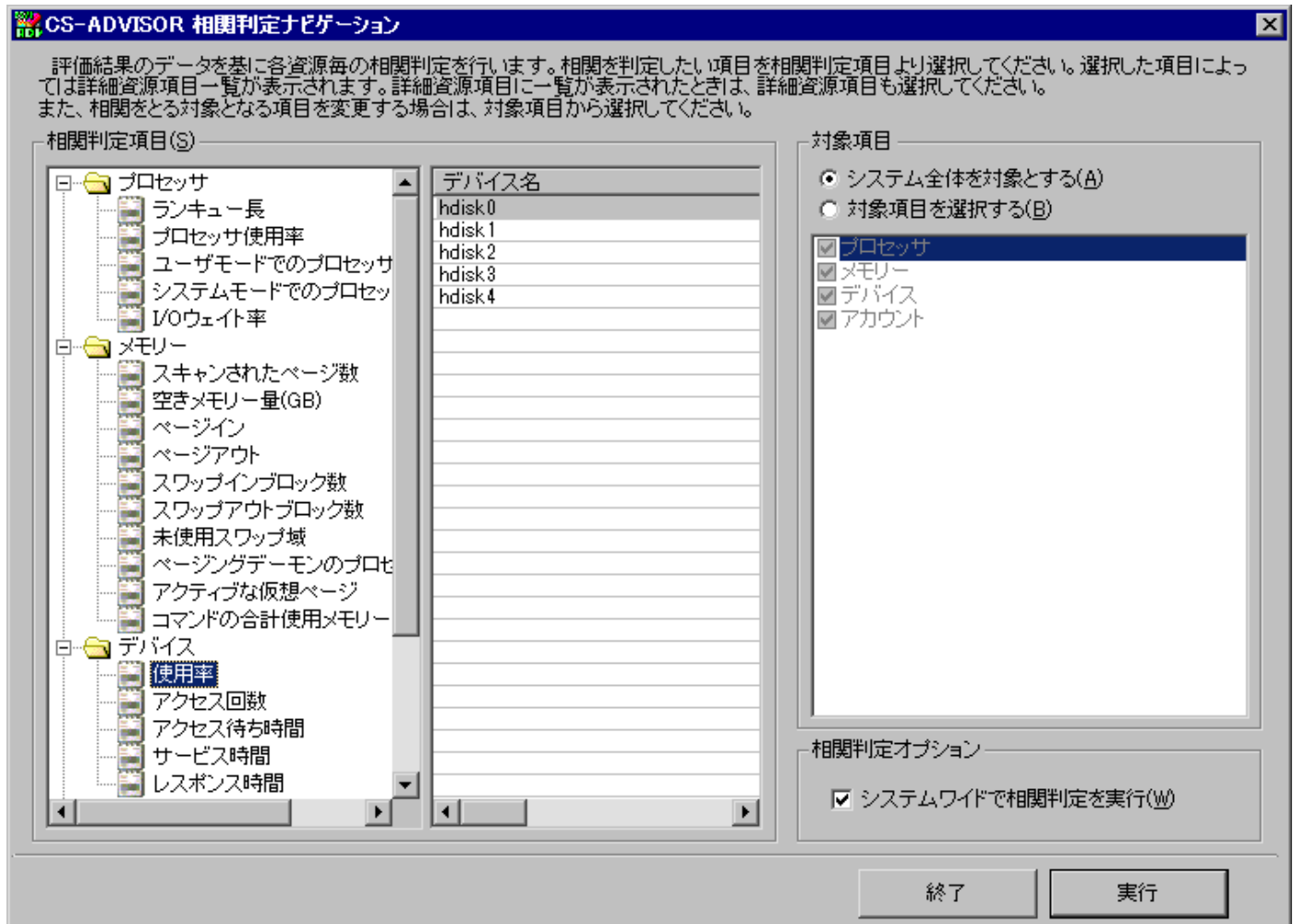
「評価対象日付 / 時刻(D)」欄から削除したい評価結果を選択し、[評価結果削除(R)]ボタンを押下します。



[はい(Y)]を選択すると、日付フォルダ以下のすべてのファイルが削除されます。

## 1.7. 相関判定

本紙マニュアル「1.6. 評価結果閲覧」の「CS-ADVISOR 評価結果閲覧」画面にある[相関判定]ボタンを押下すると、「CS-ADVISOR 相関判定ナビゲーション」画面が表示されます。本機能では、指定された 2 つの資源項目の相関値を出力します。資源毎の相関値を評価したい場合に実行します。



### 1.7.1. 相関判定方法

相関値の計算を行いたい資源項目を「相関判定項目(S)」欄から選択してください。「対象項目」で選択されている資源項目との相関値を出力します。

#### (1) 相関判定項目(S)

##### ① 資源項目ツリービュー

評価の結果、相関判定を行うことが可能な資源大項目が表示されます。資源大項目をダブルクリックすると資源大項目内で相関値の取得が可能な資源項目がツリービューに表示されます。相関判定項目として有効な資源項目が選択されると[実行]ボタンが選択可能となります。

##### ② 詳細資源項目一覧

「資源項目ツリービュー」で詳細資源項目の指定が必要な資源項目が選択されると「詳細資源項目一覧」に資源項目に対応した詳細資源項目が表示されます。詳細資源項目に表示される内容は、選択された資源をさらに特定する装置番号やユーザ番号の一覧です。

## (2)対象項目

相関判定の対象となる資源項目を指定します。上記、資源項目で選択した項目と本項目で指定された全項目の相関値を出力します。

### ①システム全体を対象とする(A)

すべての資源大項目を相関判定の対象資源項目とします。

### ②対象項目を選択する(B)

相関判定を行う対象項目をリストボックスより選択します。リストボックス中のチェックボックスにチェックがされた項目のみ相関判定の対象資源項目とします。

## (3)相関判定オプション

相関判定を実行する際のオプション設定を行います。

### ①システムワイドで相関判定を実行(W)

相関判定を行う対象となるデータの範囲が異なるときの欠損値の扱いを変更します。

「システムワイドで相関判定を実行(W)」を有効とした時は、どちらか一方に欠損データがある場合、欠損データを'0'に置き換えることでデータの範囲を一致させ相関判定を行います。

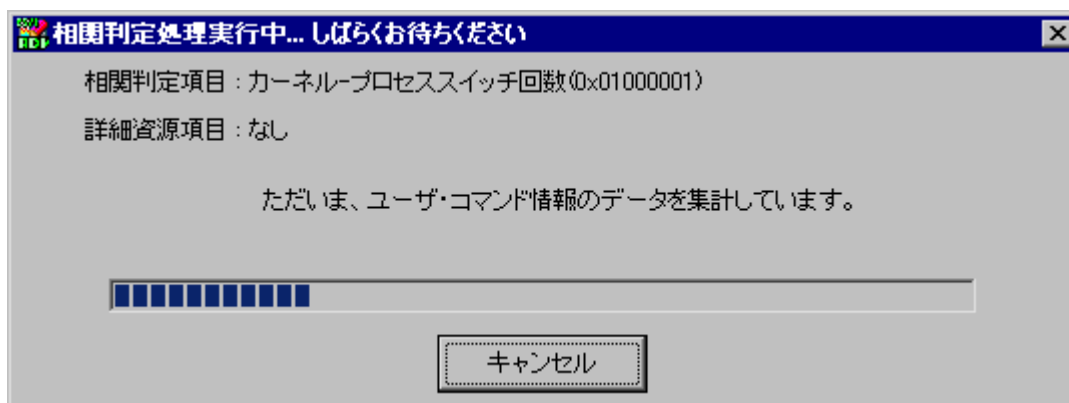
「システムワイドで相関判定を実行(W)」を無効とした時は、どちらか一方に欠損データがある場合、そのインターバルを相関判定の対象インターバルから外します。

## (4)終了

[終了]ボタンを押下すると、「相関判定ナビゲーション」画面を閉じて「CS-ADVISOR 評価結果閲覧」画面に戻ります。

## (5)実行

[実行]ボタンを押下すると、相関判定処理が開始され、進捗状況がプログレスバーに表示されます。相関判定処理が終了すると、拡張子「.txt」に関連付けされているアプリケーションを起動し、相関判定結果を表示します。



[キャンセル]ボタンを押下すると、相関判定処理を中断することができます。

**注意！**

相関判定ナビゲーションは最新の評価条件ファイルの設定に従い処理を行います。評価条件ファイルの設定を変更した場合は評価実行時と異なる結果が出力される可能性があります。再度評価を実行し、相関判定ナビゲーションを実行してください。

**例：**

評価条件ファイルの対象日付が 2015/12/31 の場合、2015/12/30 を対象とした評価結果からは相関判定を行えません。

## 1.8. バッチ実行

CS-ADVISOR は、バッチ処理にて評価を実行することができます。バッチ処理を実行するには、評価条件ファイルが 1 つ以上作成されている必要があります。

### 1.8.1. 実行手順

Cs.exe 起動時、パラメータ(コマンドライン)を付与することによりバッチ処理を行います。Cs.exe は CS-ADVISOR インストールフォルダに格納されています。

実行の指定は、コマンドプロンプトのコマンドラインや、[スタート]メニューの「ファイル名を指定して実行(R)...」から行います。

"x:¥IIM¥CS¥Cs.exe" /BATADV /SITE Site1 /SYS Sys1 /CONF 評価条件ファイルタイトル  
"x:¥IIM¥CS¥Cs.exe" /BATADV /CONF "評価条件ファイルタイトル A, 評価条件ファイルタイトル B"

CS-ADVISOR のバッチ実行は、パラメータ「/BATADV」を付与します。

そして評価条件ファイルを特定する情報として「サイト名」、「システム名」、「評価条件ファイルのタイトル」をそれぞれ、「/SITE」、「/SYS」、「/CONF」オプションで指定します。

「サイト名」、「システム名」、「評価条件ファイルのタイトル」に空白記号が含まれている場合、ダブルクォーテーション(")で囲む必要があります。

単一システム評価の場合は「サイト名」、「システム名」は省略可能です(複数システム評価の場合は後述の/INI パラメータを使用してください)。

「サイト名」、「システム名」を省略した場合は「評価条件ファイルのタイトル」が合致するすべてのサイト／システムを対象に評価を行います。

「評価条件ファイルのタイトル」をカンマ区切りで複数個記述する事も可能ですが、この場合、「サイト名」「システム名」の指定はできません。

パラメータに評価条件ファイルを直接指定することも可能です。

その場合、起動パラメータは以下のように、フルパスを指定します。

評価条件ファイルのパス名に空白記号が含まれている場合も同様に、ダブルクォーテーションで囲む必要があります。

"x:¥IIM¥CS¥Cs.exe" /BATADV /INI x:¥IIM DATA¥CS¥ADVOUT¥Site1¥Sys1¥Csadv sitennn"

複数の評価条件ファイルを1つのバッチファイルで実行する場合は、start コマンドを使用し、以下のようなバッチファイルを作成します。

```
start /d "x:¥...¥CS¥" /w Cs.exe /BATADV /INI "x:¥...¥ADVOUT¥Site1¥Sys1¥Csadv_site001"
start /d "x:¥...¥CS¥" /w Cs.exe /BATADV /INI "x:¥...¥ADVOUT¥Site2¥Sys2¥Csadv_site002"
start /d "x:¥...¥CS¥" /w Cs.exe /BATADV /INI "x:¥...¥ADVOUT¥Site3¥Sys3¥Csadv_site003"
```



Cs.exe の起動を 1 回とし、対象とする評価条件ファイルの指定を外部ファイルに記述する事も可能です。  
この方式でバッチ実行する場合は、パラメータ「/BATADF」を付与します。  
「動作環境設定 (CS-ADVISOR / CS-Network ADVISOR)」からバッチファイルの自動生成をした場合はこちらの形式で作成されます。

[バッチファイル]

```
start /d "x:¥IIM¥CS¥" /W Cs.exe /BATADF Csadflst.txt
```

[Csadflst.txt]

```
x:¥IIM_DATA¥CS¥ADVOUT¥Site1¥Sys1¥csadv_site001
```

```
x:¥IIM_DATA¥CS¥ADVOUT¥Site1¥Sys1¥csadv_site002
```

```
x:¥IIM_DATA¥CS¥ADVOUT¥Site1¥Sys1¥csadv_site003
```

任意の外部ファイルに評価条件ファイルを指定する事も可能です。  
その場合、/BATADF パラメータに任意の外部ファイル名を指定します。

[バッチファイル]

```
start /d "x:¥IIM¥CS¥" /W Cs.exe /BATADF <任意の外部ファイル名>
```

[<任意の外部ファイル名>]

```
x:¥IIM_DATA¥CS¥ADVOUT¥Site1¥Sys1¥csadv_site001
```

```
x:¥IIM_DATA¥CS¥ADVOUT¥Site1¥Sys1¥csadv_site002
```

```
x:¥IIM_DATA¥CS¥ADVOUT¥Site1¥Sys1¥csadv_site003
```

外部ファイル名を省略した場合は、Csadflst.txt を読み込んで評価を実行します。

[対象期間指定用パラメータ]

/FROMDATE ..... 開始日です。NOW(,,)形式の文字列を指定します。  
 /FROMTIME ..... 開始時刻です。HHMM 形式で開始時刻を指定します。  
 /TODATE ..... 終了日です。NOW(,,)形式、または FROM(,,)形式の文字列を指定します。  
 /TOTIME ..... 終了時刻です。HHMM 形式で終了時刻を指定します。  
 /Fyyyymmdd..... 開始日を直接指定します。  
 /Tyymmdd..... 終了日を直接指定します。

[開始日終了日指定形式]

NOW(,,) ..... 今日(評価実行日)を基準とした相対日指定です。  
 開始日と終了日の指定に使用できます。NOW(,,)には、3つのパラメータを指定することができ、それぞれ、年・月・日の相対値を指定します。また、値の後に F を付けてパラメータを指定すると固定年月日となります。

ex1.NOW(-1,-2,-3) → NOW(1 年前,2ヶ月前,3 日前)。1 年 2 ヶ月と 3 日前の特定日を表します。  
 ex2.NOW(,,1) → NOW(0 年前,0ヶ月前,1 日前)。昨日を表します。  
 ex3.NOW(,,) → NOW(0 年前,0ヶ月前,0 日前)。今日を表します。  
 ex4.NOW(,-1,1F) → NOW(0 年前,1ヶ月前,1 日)。先月の 1 日を表します。  
 ex5.NOW(2009F,8F,1F) → NOW(2009 年,8 月,1 日)。2009 年 8 月 1 日を表します。

FROM(,,) ..... 開始日を基準とした相対日指定です。  
 終了日の指定にのみ使用できます。3つのパラメータの意味は、NOW(,,)と同様です。

ex1.FROM(,,) → FROM(開始年,開始月,開始日)。開始日と同じ日を表します。  
 ex2.FROM(,,1) → FROM(開始年,開始月,開始日の 1 日後)。開始日の翌日を表します。  
 ex3.FROM(,1,1F) → FROM(開始年,開始月の翌月,1 日)。開始日の翌月の 1 日を表します。

[パラメータ指定例]

・今日を対象とする  
 /FROMDATE NOW(,,) /FROMTIME 0000 /TODATE NOW(,,) /TOTIME 2359  
 ・昨日を対象とする  
 /FROMDATE NOW(,,-1) /FROMTIME 0000 /TODATE NOW(,,-1) /TOTIME 2359  
 ・特定の日を対象とする(2009/8/1 の場合)  
 /FROMDATE NOW(2009F,8F,1F) /FROMTIME 0000 /TODATE NOW(2009F,8F,1F) /TOTIME 2359

[日次評価一括処理用パラメータ]

/RANGE(開始日,終了日,1 日の区切り時刻有無 0:区切り無し 1:区切りあり)

複数日分の日次評価を一括指定して実行することができます。

ex1.RANGE(20160801,20160803,0) → 1 日の区切り時刻は 0 時とします。  
 20160801 から 20160803 までの 3 日分の日次評価を逐次実行します。  
 ex2.RANGE(20160801,20160803,1) → 1 日の区切り時刻は評価条件ファイルの設定値とします。  
 3 日分の日次評価を、1 日の区切り時刻を考慮して逐次実行します。  
 以下の 3 つのパラメータと同義になります。  
 /F20160801 /T20160802  
 /F20160802 /T20160803  
 /F20160803 /T20160804

メモ！

- ・評価実行時に対象日時を設定するタイプの評価条件ファイルは、バッチ処理にて実行できません。
- ・CS-ADVISOR の 2 つの起動パラメータ「/BATADV」「/BATADF」を併用することはできません。
- ・/F、/T パラメータと/FROMDATE、/TODATE は同時に使用できません。

### 1.8.2. 実行確認

バッチ処理が実行されている間は、メニューバーのタスクトレイに ES/1 NEO CS のアイコンが表示されます。

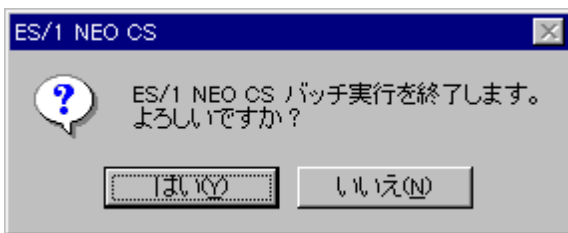


### 1.8.3. 実行中断

バッチ実行を途中で中断する場合は、ES/1 NEO CS のアイコンをマウスで右クリックします。マウスで右クリックすると、ポップアップメニューが表示されます。



「ES/1 NEO CS バッチ実行中止」をクリックすると、終了確認メッセージが表示されます。



[はい(Y)]ボタン      バッチ処理を中断し、プログラムを終了します。

[いいえ(N)]ボタン    バッチ処理を続行します。

### 1.8.4. スケジューリング

バッチ処理を自動実行するようスケジュールし、対象日付が自動(相対日)となるよう設定することにより、完全に自動で評価を実行することができます。バッチ処理のスケジューリングについては、別紙マニュアル「CS-MAGIC 使用者の手引き 7.10.2. スケジューリング」を参照してください。

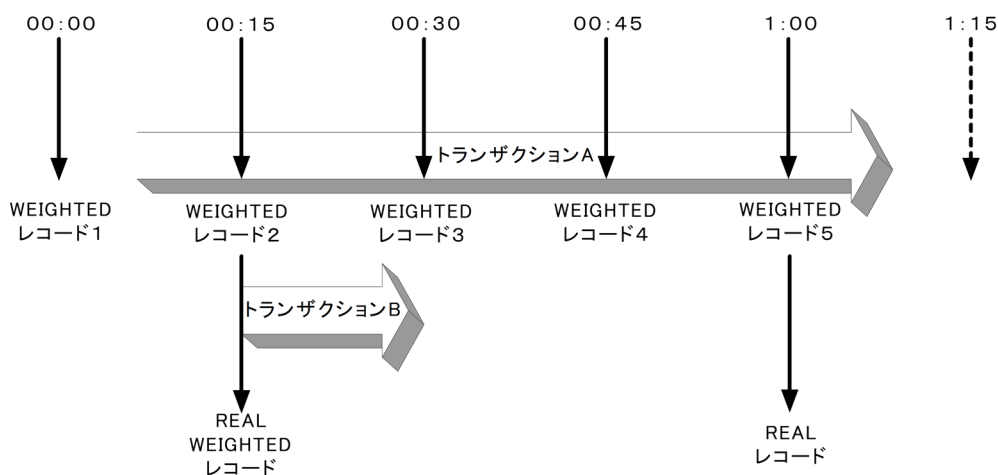
## 第2章 添付資料 A. SAP ERP 統計データを評価する際の注意事項

ES/1 NEO CS シリーズでは SAP ERP 統計データ解析のために、SAP ERP が出力する STAT ファイルを元にしています。しかし、STAT ファイルには統計データ収集インターバル毎にデータが出力されるのではなく、SAP ERP トランザクションが終了した時点でデータが出力されます。

そのため ES/1 NEO CS シリーズでは、収集した統計データをインターバル毎に按分した値を計算して求め、相関判定や評価を行う際に使用しています。

### <インターバル毎に按分する例>

0:10 に開始し、1:10 に終了するトランザクション A と、0:15 に開始し、0:30 に終了するトランザクション B があつたとします。



トランザクション A の WEIGHTED レコードは 00:00/00:15/00:30/00:45/1:00 に各 1 レコードずつ計 5 レコード作成され、REAL レコードは 1:00 に 1 レコード作成されます。

トランザクション B の場合は、00:15 に REAL と WEIGHTED レコードが 1 レコードずつ作成されます。